和漢

朗詠國字抄

七八

へ7
4399
4

へ7
4399
巻 4

雜
閑居

獨東都の履道里ふ。閑居泰適之叟有ることを記るのふあ〳〵不。亦皇唐太和の歳。理世安樂之音有ることを知令とのり

和漢朗詠集抄卷之七

雜

閑居 閑いもづら

不獨記東都履道里。有閑居泰適之叟。亦令知皇唐太和歳有理世安樂之音

白

洛中ふ題とる詩の序〳〵東都い洛陽城履道里い白氏の住處の地名泰適叟い自を云皇唐い大唐と云ご〳〵太和い十四主文宗の年号理る世ふ意安〳〵むこ也あるこ〳〵毛詩の序ふ治世之音安以樂其政和〳〵我身かく〳〵あるぞうふひ〳〵び治世の安樂を人ものもこ〳〵せこ〳〵と云意

宮車一去樓臺之十二長空隙駒難追綺羅之三千暗老

車ハ九魚切キヨ

張讀

閑なると題とせり　賦に帝王の宮車に駕して一たび内裏を去りぬれば崑崙仙宮の十二樓に比せり　都の建るべる殿の長くさびしきぞ

荘子に月日のうつる白駒の隙を走るごとしと云へり　隙駒は追うけても止ぐ〳〵　宮中三千人の美女の綺羅をうばしもいつしか老てのべづるる

さまたげ〳〵　玄宗の安祿山が乱に内裏をひたすら蜀へ幸し　安德天皇源氏に攻られて須臾へ落のべるのさまあるべし

鶴籠開處見君子書卷展時逢故人

出家に開に籠居題に閑居して籠と開と鶴をとろへ君子に　白

むかしぐ〳〵思ふ鶴の性ゆるやかにして君子に比すべし　書卷と展

故人に逢に心地すゝしく蒙求と

よりて王戎裴楷に逢心地をる如きに

人間榮耀因緣淺林下幽閑氣味深

閑に氣味深

官途自此心長別世事從今口不言

官途に此自心に長別世事に今從口に言不

幽思窮不深巷人無之處愁腸欲斷

幽思窮不深巷人無之處愁腸欲斷と欲閑寛に月有之時

蕙帶蘿衣抽於北山之北蘭橈桂檝於東海之東

蕙帶蘿衣を北山之北に於抽蘭橈桂檝を東海之東に於敲

老後生と保計を題とせり　此世の栄耀に先の世の因縁浅からぬこと　白

思へば今山林に籠居身の幽にあづかるぞ却てさこそあらい

官途自此心長別世事從今口不言

香炉峯のふり山荘と下東の壁に五首の詩を題せり　句に官　白

途にいろう心に思ひとり世上のことに今より言もうけじと

幽思不窮深巷無人之處愁腸欲斷

閑寛有月之時　白

貧女のさまを賦す　巷の人も問こぬ処に

一人住てうびしきふしづるる窓に月のさすに腸も断ぐらるぞ

蕙帶蘿衣抽於北山之北蘭橈桂檝敲於東海之東

江相公

世とともに身に蘿衣に蕙をまとと捻て帯とし　簪かんらをぐるとも

なれ白を抽まつる漢書に法真字に高卿所の太守より功曹と云

都府樓纔看瓦色　觀音寺只聽鐘聲

跡と晦して未苔徑
の月と拋(未)喧を避
て猶竹窓の風に卧

司ホせんとある時り一強て司とりろ〳〵北山の北ニのぐんと云ー故事
建康府上元縣ホ北山あり今こゝにいさぶしきぶ上の閑処と云心ぞ
隱逸の句也蘭の橈桂の檝も花やかなる心ニあり寸句ひゐる木香
ある草と出ヤーのこゝて手ふあるうのとゞぐ〳〵一葉の舟の具とそるまぞ
〳〵楚辭ニ桂のそぢ蘭のさを漁父がゆなでと鼓てうこひーとあるとこゝろ
呂連公東海の東ホ世とすてゝし故支こゝに海のそゝと云心ニ解べし
その後東坡が赤壁の賦ホ此句を
おそ〳〵相公の名挙ありしとぞ

都府樓纔看瓦色觀音寺只聽鐘聲

門と出ず引籠居る題ニ都府い都督府ニて太宰府と云菅公菅丞相
配所ニ府の樓の棟ぐうとぐこゝろ〳〵筑紫觀音寺い天
智天皇の御祈願ニて滿誓沙弥別當ニ其寺の鐘の声の〳〵
聞ゆ〳〵ニて家を出ざる心あ〳〵感哀あり〳〵

晦跡未拋苔徑月避喧猶卧竹窓風

白樂天が香炉峯の雪の詩意に同ず世とのがれ山林ニ　平佐幹
あ〳〵とく〳〵せども苔の徑ニ月のあき〳〵ろ〳〵ろ拋ぐ〳〵世上の喧〳〵ろ

陶門跡絶春朝雨燕寢色衰秋夜霜

眺望
風白浪と翻〳〵
花千片雁青天ニ
點ず字一行

陶門跡絶ぬ春朝
の雨燕寢色衰秋
夜の霜

のぐとさけこんぐも竹の葉ニ風のそよぐ音いとあんぐ色と晦ニ明
なるとこゝろまず考つるるホ動とこゝろれぬ意あり

陶門跡絶春朝雨燕寢色衰秋夜霜

閑居ホ日もすぐ〳〵夜もあけあるる心を題せる陶淵明が門ニ人跡　江以言
もなく〳〵春雨のころ日とくしとゆる燕寢い美人の居どころ奥と云ぐ〳〵年
おひ色おとろ〳〵く秋の夜長ニ
霜きまぐ〳〵明〳〵ぬるさぬ〳〵

古今
都鳥いたもの思ひまでわまぶけつるものひとを思つとも判ホ遍服
恋の哥〳〵月日のうつるも人まつ間いかぐばかりホ人も
つれホ問来ず草おひげりあきけるこゝろ〳〵

眺望

眺望
こゝろ望る

風翻白浪花千片雁點青天字一行

江のわたりの樓ニ晩のけしきをながめる詩〳〵海のおもてとき
ゞタ風ホひるがる浪い千片のものぶ散やふあ空とぶ厂い青き紙ホ一行の　白

紫闥を出而東に望ば山岳半は雲根之暗に挿り翠嶺を踏而西に顧ば家郷は悉く煙樹之深に没す

天台山之高巌を見れば四十五尺の浪白く長安城之遠樹を望ば百千萬茎の薺青

字と書るゆへかくいふぞ片ハ一片二片と云義なり

出紫闥而東望山岳半挿雲根之暗。
踏翠嶺而西顧家郷悉没煙樹之深

尊敬

紫闥を出て東をうちのぞめバ高き山岳がなかばかり雲の根につきいりて半より下のこらず東山のかげ西に都とうちまじて煙のかゝりの木の間に家居もみゆる翠の嶺ハ山と黛のいろと云ごとく諸木しげりて青きをいふなり

見天台山之高巌四十五尺浪白。
長安城之遠樹百千萬茎薺青

順

唐の天台山ハ剡縣にあり四丈五尺の滝あるをかりて比叡山を云之五所の都東京ハ洛陽西京ハ風翔南京ハ江陵北京ハ太原中京ハ長安日本ハ東国ゆゑ異邦の名をかりて都を洛陽とハ又中京のこゝろを以て長安城とも云顔氏家訓に遠くして木をのぞめバ薺のごとしとあるによりてかき

江霞浦を隔て人煙遠く湖水天に連て雁の點ずると遙なり一行の斜雁は雲端に滅し二月の餘花は野外に飛

老眼迷ひ易し残雨の裏春情繋ぎ難し夕陽の前

都の木々がもとをくゝりて千万のすゞなのごとくしあると作りしん

江霞隔浦人煙遠。湖水連天雁點遙

直幹

江州志賀寺にて作る也江湖に霞こめて浦にある蜑の笘やの煙遠くまた天と連なる湖の沖遠に雁の行がしぬるは煙ハ人の栖にかけつるぞ

一行斜雁雲端滅。二月餘花野外飛

順

春のすゞめと作る也空にすぢかひ一行の雁の雲間にかくれ行二月のころ散のこりたる梅の花が野辺に飛ゆくさまなり

老眼易迷殘雨裏。春情難繫夕陽前

順又篤茂

上に同じ心の題之雨のなごりの空それざるに老眼さやかにみえざるぬ花のちる鳥のさへづりふりき立春の情夕陽にかかり繫とめがたく春をおしむ也

古今 また落せば柳桜をこきまぜて都ぞ春の錦なりける 素性

花ざかりに都を見わたせバ花ハ紅柳ハ緑にてこきまぜて錦をおりかけたるごとし山のすそより見おろして京をながめたるぞ文字ニハこきまぜてハひとつにある意

餞別

君與後會何の處
を知人。我爲に今
朝一盃を盡

前途程遠。思を雁
山之暮の雲に於
馳。後會期遥に
纓を鴻臚之曉の
涙に於露

餞別

餞酒食を贈和訓むまのくるひけ餞別い知已
れと惜酒食とをくめ馬の鼻と行路向る義へ

與君後會知何處爲我今朝盡一盃

白

臨都駅にて崔十八と云人の遠くゆくるひけせくを定る比世
ゆへいなきの処にて此後あひとる知らけきばしひて酒をすむとをう

前途程遠馳思於雁山之暮雲後會期遥露沾纓於鴻臚之曉涙

後江相公

七条朱雀羅城門の傍に鴻臚館あり異国の人とも日本に来朝する
を舎す館に渤海の周文德唐使として来る餞別の序前途
はるかなりけれ別てのちも今日のうら門を通らんと思をメせく
雲とのそもりそあらんと都より胡地の道に門山あり山高して胡国
へ帰る人の越をうらを通さんて峯と断ひきしうら名づく後の絲
會期もまさんぐ落涙おさ〳〵冠の纓まで露○渤海の人此句を
こて涙とるひ胸をとゝけう後年日本人に問て云江の朝綱三位に
いとやとていつ未しかの人云日本に才德をもちひる国と

昔に丹鳥と聚て競
陰と十五年之間に
於競今に畫熊を
促て。手を三百盃之
後に於分と欲

昔聚丹鳥競寸陰於十五年之間今促畫熊欲分手於三百盃之後

順

銭の詩の序に丹鳥に丹〳〵てとゝ義て蛍のこと漢書に車胤字に武
子まづ〳〵く文を好蛍を聚てふろうより其ひろうて書とを
博士にいるとゝうす陰とをふ。あるて学問する夏の
禹王に寸陰をおしむとの云春秋別傳に窮越三十才まで農業を
つとめつゝせべ此苦をまぬるんと云に人のいつく三十年学びまぬるとん
もろ〳〵年闌さまで学べども得ずして窮越いつくいくふとも我に
食ド人に寝ても吾にもド夜をりて日ふつべ十五年にて三十年に
あるくんと寝食をとりて学び七年にして六箇国の刺史国守となり
後周の武王の師とをうと下の向いかくの如く学問して受領に至
さまと云畫熊に熊軾とて受領の車のまへのいたに熊をゑゞく
非礼をあさゞる獣るわべ鄭玄刺史となりてゝ学ふ百人の
弟子酒と携さくうてもめ〳〵人ども三盃とうけ飲て酔ざう
しとあり手を分い人に
今にいるるきらとう

楊岐路滑なり。我之人を送こと多年。李門波高。人之我を送こと何の日ぞ

萬里東に来何の再日ぞ。一生西に望こと是長襟なり

楊岐路滑。我之送人多年。李門波高。人之送我何日　江以言

別路に花飛で白と云詩の序也此句は作者学者あまた登庸られざる述懐をよそへて楊と李は氏なれどもやすりと訓ずるなり題の花と云り楊朱と云人岐路をみて南へもゆくべく北へもゆくべし道のまよふべきとて泣たると淮南子に出人の南北へわかれゆく岐あまたあひ踏滑し今まで我かくのごとく人を任国のおもむけもし我又人にわかれ餞せらるゝまんと何日かあらんと云心也後漢書に李膺字は元礼学問に名高く其ころの士此人に接らるゝものをば登龍門と名づくとあり魚が龍門の滝を登るにたとへし故事ありてかのひらきがたきを李門波高と云

萬里東來何再日。一生西望是長襟　野相公

篁隠岐国の配所より帰洛の時唐人の飯国をうらふあはで作と云今万里を帰又東方にきたらんとのぞむも日ぞ此たまたまに一生西の方とのぞまんこと長きのおもひそある或人いはく此句はこれ詩の本躰也と

九枝燈盡て唯曉を期も。一葉舟飛で秋を待不

浮世を以後會を期せんと欲とも還て石火の風に向て敲ことを悲

九枝燈盡唯期曉。一葉舟飛不待秋　菅

渤海国の使を送る時の作也夜ふけ燈つきぬればあかつきをまちて立んとする一葉は秋を待てちるに客の一艘の舟はもはやふなでしぬくと開元遺事に韓国夫人五枝燈樹を置とあればこゝにいふも枝九ツある燈臺也○下の句成て上の句を得ざりしが朝綱卿に主合なり燈を以て作たりしとさちすち九枝燈の句を案じ得たると舟と一葉と前巻に出

欲以浮世期後會還悲石火向風敲　菅

渤海の使裴氏にあるむけしのこ定めた浮世に在て再あへことちぎるとも石火のきえやすきを風に向てうつごとくあるべき命なればば存てあふべきやいかゞと悲き心

菅家文草に還の字先とあり

後撰

思ひやるこゝろばかりはさはらじを何へだつらん峯の白雲　橘直幹

身こそへだて居とも我志は心の雲もさはらず思ひやるべきを峯の白雲はなにへだつらんと也山遠して雲行客のあとをうづむといふこゝろ

行旅

孤館に宿時風雨を帶。遠帆歸處水雲に連

家集

年ごとの春ごとわかるとも人よりとをくなりぬべきかな　元真

三月あらて四月きさらきとする年ごの春の別のあれすると旅行人う
もくまゐる人しそるとをく知るれど今人ところ〻ろ春のるゝを惜
ろものよりさねく
よゐるゆべしとこゝろ

古今

いのちぐるしからぬものなりけり　白女

右近衛少將參議源舒が息源実が筑紫へ湯治ゆまうりる作
者白女い源造が女して江口の遊女へ山嵜まてとれをおもつよゆ
るえ命さくあゝ一旦ろゝもつるゝあゝべれい悲べゝずとの心又云
ゆゝとまさぬ世ゆるい此時ゆゝ別ゆやゆんとゆゆむろゝ

行旅

孤館宿時風帶雨遠帆歸處水連雲

李謝が送別の詩〻孤館に旅寐して風雨さびゝく海と天と合るゝく〻ざるゆる沖とをく帆うけ舟のゝるさまゝ　許渾

行行とさく重さ行行さろ。明月峽之曉の色盡不。渺渺として復渺渺さり。長風浦之暮の聲猶深

曉長松之洞に入ゝ。岩泉咽で兮嶺猿吟ゝ。夜極浦之波に宿すゝ青嵐吹て兮皓月冷

渡口の郵船い風

行行重行行明月峽之曉色不盡渺渺復渺渺長風浦之暮聲猶深　源順

前の餞別の昔聚丹鳥と云句ゝ同〻序文〻行〻重行〻いゝるゝ〻ゆく
ろろ明月峽い山水の詩の釈ゝ〻〻渺〻いゝをゝ白長風浦い地名〻
江水の東節春縣の南にあゝと水経ゝ出長風と云地ゆゝ暮の風
の声猶深く止ざる意明月峽ゆゝあゝつゝさゝ月のひゝゝつゝゝ

曉入長松之洞岩泉咽兮嶺猿吟夜宿極浦之波青嵐吹兮皓月冷　藤為雅

為雅周防守して下けゝ時室の津にて作と云長松い陰高松岩泉い
岩間よゝ落滝〻〻の猿吟ゝ〻叫〻極浦いとゝく〻ゝる浦と
云ゝろ青嵐い晴ふゝ晴て風吹〻皓い
ゝろゝさゝまゝてさびゝくゝあゝまゝけゝるさゝまゝ

渡口郵船風定出波頭謫處日晴看

定て出波頭の謫
處に日晴て看

渕蘆の夜の雨他
郷の涙岸柳の秋
の風遠塞の情

蒼波道遠して雲
千里白霧山深
して鳥一聲

篁隠岐国へ遣さる時の作へ渡の口の郵船の風の定るを
まつて漕出す郵の駅へ謫處に流さる国へ謫せらるを訓ず吾行
べき配所と思へおろう波頭に日の
晴ふ看ると心あるべ〜

野相公

渕蘆夜雨他郷涙岸柳秋風遠塞情

旅の泊の意を作る尓雅ふ水中の居を渕と云とあり海中の
砂水に入り千〜らを陸とする〜渕先に生る芦の葉ふ夜のあめの音〜
てあられるふ浮寝の袖まがる〜他郷に自国とするを来て居ることを
なり岸の柳に秋風の吹て遠き胡国の地に柳多〜それをなき
〜辺塞ふ戍る人のこころに又さぞあるべ〜
と旅の身よりをくりひやるなり

直幹

蒼波路遠雲千里白霧山深鳥一聲

江刄石山寺ふ詣て作湖を眺望び蒼き波路をとく千里
の雲に入〜るへ下の句を案じるづひつ陸奥へくだれ足柄やま
まで考いるふ具〜る女道遠〜くるおるげさみやまぢに入まで
もきこゆぬとうの声るを口号るふぞやで下の句をきうふ紀

直幹

山路に鳥の声を聞ふ
きこゆるさまを作るそ

古今

わのくとろの渕に霧ふ籠るまでに思へ人丸

天明に夜の明行空のおぼろにさぐるまぬ〜のぐとあける明石の
うらのあさぎりに漕出るる舟のしまぐくをゆ〜ぐ人いづくか
ゆくらんとなげめやり哀ふ思ふと此哥人丸弟一の詠そ諸説區々
公任卿も九品ふおろ〜この上品上とのつ嶋とい双子ドま
鞍掛嶋など
るふなり〜

古今

和田の原八十嶋かけて漕出ぬと人には告よ海士の釣舟　篁

隠岐国に遣さるを聞て出立て京なる人のもとへつかはし
ける和田の原い海の惣名八十島い多くのしまに人に告よ京なる
人をさすあまの釣舟いこぐる処のものふ云つ〜ふるこころ〜
流人ゆゑ釣のの賤に言をあつ〜〜と云い非人〇仁明帝御時
承和五年遣唐使ふ命ぜ〜〜時正使弟一のふ風波ふ損じ
弟二の篁の舟とうんと堅〜争て肯ぜず勅諚とをもくいろ

庚申

年長じて毎に甲子を推に労す。夜寒して初て共に庚申を守

て流罪せられ給へ其後勅免ありけり

拾遺 たよりあらばいかで都へつげやらむ今日白河の関は越えぬと 兼盛

音に聞のみきゝたるに思ひし白河の関はけふこそ越しとことを都へつげしらせん便あらばいかでそれをしらせんものをと云心に意をとめし句を

そのまゝ解べしまらしざれば いかでの義通せず

庚申

此夜寝ざれば三尸九虫災をなすと古書にみえたれば和哥をも寐ぬ夜とよめり 大清経に彭侯子常遊子命兒子と唱ふれば其鬼難をまぬかれ福をまねくとあり 為憲の口ずさびに彭矯子彭常子命兒子悉入幽冥之中去離我身これを庚申の夜の誦と云 僧史畧に庚申會道士の邪法へ釈氏に行ひしと

年長毎労推甲子。夜寒初共守庚申

許渾

三躰詩に出 絳縣の老人年を問ふ甲子を以答ること左傳に出ることを本文とし年長数歳経されば吾年もたらしにおもへばされを推も苦労之此詩王山人に贈るわざふ下の句共にとあれば此人をさして冬の夜寒にともに庚申をまもらんぞ

帝王 付 法皇

己酉年終て冬の日少。庚申夜半にして暁の光遅

己酉年終冬日少。庚申夜半暁光遅

菅

仁和二年菅公讃岐守任国より寛平元己酉年の御作也其年も末よなり日みぢかくなりしさまども今宵庚申の夜さすがに冬なれば猶長くてあけぬるとの當意なり

おしなべてねぶらざるを鶏がねやまさきたる魚やさえぬらん よきくらべ

かのえさるとかけしるべ狩も漁も猟のあしとを獲と云さし文字なれてよむべし蛋が先ぶりて魚のさえぶりしとあいるすなをよろり

いかでか人をもとえんわやしきは思はぬ井ならざるまゝにを よきくあらん

かのえさるをかくもしん恋哥之おもいぬ中の去ぶらくせんさとあれおやさをおもひろひてりそさいあるやと人にとりまわしとなり

帝王 付 法皇

徳天地に配して公位に私せざるを帝と云 譲位の後佛門に入給ふを法皇と云

漢高三尺之劍ハ。坐ヲ〻諸侯ヲ制。張良一卷之書ハ。立ドコロ師傅ヲ登

項莊之鴻門ヲ會せり。情を一座之

漢高三尺之劍坐制諸侯張良一卷之書立登師傅

後漢書文

漢の高祖蕭何ヲつげていハく我布衣ヨリ起て手ヲ三尺の劍を提て高〻上り天下を取と芒碭山ヲ白蛇を斬一劍と云史記ハ諸侯ハ諸国の侯日本ヲ大名なり風の詩雲の詩の釈見合すべ一張良字ヲ子房若ハ時下邳と云処圯橋のもとにて老翁履をおとし取て得させよと云を年の高きを敬ひ跪てさ〻ぐ翁足ヲうけて行すだけり張良あやしてて後ひ申〻ハく翁告て孺子をもてさとすと

其後つゐに巻を授さう太公望の兵書ヲ張良後ヲ劉季に志ざして此書を以て軍のことを〻謀を帷幄の中ハ回一勝ことを千里の外ヲ決もろ良ハ功ヲ良のち丞相と成り師傅ヲ帝王の師臣ヲ太師太傅太保をもろ国の三公ヲあるとハ大政大臣左右大臣ヘ今七書の三畧彼翁黄石の旨と云

項莊之會鴻門寄情於一座之客漢

客ヲ於寄漢祖之沛郡ハ歸一。思ヒ四方之風に傷ム

祖之歸沛郡傷思於四方之風

同前

一説ハ藤の雅材後漢書を引て書る文と云項莊ハ項羽の季父一座の客ハ漢の高祖ハ鴻門の會ハ劍と拔て舞しハ高祖を討ん心なりも支ゑず高祖乱を沿め古郷沛郡ハ帰り酒を置て邑の父老を招き宴會せり此上ハ賢士を得て四方をさ〻ふおさめ〻〻思を傷ム〻〻楚の項羽沛公高祖を鴻門ヲまねき酒ともろて竊殺んとす時ヲ項莊劍を拔て舞張良ハ項伯と親けまゐ示し合せ〻ハ〻ぶハ莊討んともれハ伯もまた舞て沛公をぶろ張良門外ヲ出樊噲とよバ噲入んとするに門を堅〻して入ずして軍門を打倒一入て幕とゝげ立髪逆ヲ立眼と怒一まるゞりとゞく裂ゝ項羽ヲ見て勇士ヘと酒とすゝむ噲ハ〻〻我ハ死をゞもあれず斗酒を辞せんやと三斗を飲者ハあり彘の肩を劍を拔てきり〻〻此内ヲ沛公坐と立て衣服をゝひそゝふのゞもろ〻ハ其のち楚王項羽と十一天下を定むる下の句ヲ漢祖と云も高祖ヘ黥布と討て故郷沛ハ帰り哥ていハく大風起ハ今雲飛揚威加海内ハ今帰故郷安得猛士ハ今守四方風を自らふさ〻く雲を乱ふ四方之風と作る文てヲ見とゞけり

四海の安危、掌の内に照。百王の理亂、心の中に懸らう

幸に堯舜無為の化に逢て。犧皇向上の人と作ることを得さう

四海安危照掌内。百王理亂懸心中

白

樂府の百錬鏡の文に楊朔の吏船に乗り楊子江に浮び五月五日の太陽午に当る時楊州のあぐゝと百ゝび錬て舟中波の上にて一ツの鏡を鑄て献る帝百錬鏡と宝とし一の〻人の形を照すとなり。さきび朝廷の為に益あり。昔唐の太宗の時魏徵と云智臣を鑑として古今をとんぐるの帝ゝかゝゞの鏡あるあれば百錬の鏡も用ゐふ足ず東夷南蠻北狄西戎の四海まゞ安もわやゝさも百王の理さるも乱さるも掌の内に照し心中に鏡を懸さんば一ツ〻〻聞きとなり。白氏文集に照を居ゝつゝ

幸逢堯舜無為化。得作犧皇向上人

白

我身太宗の明主の時に逢ひを悦ぶ唐堯虞舜上古の聖主なれば今の世を賢んとて弓ゝうさゝも為に静に治り君の恵を見ゝうゝ天下の民善道に入ることを無為の化と云荘子の犧皇い伏犧氏帝八卦を画九州を分書契を造て縄を結の改ゝの明王に向上いゝつゝと訓て今ゝる聖代に逢て上古伏犧氏の世の人のごゝ安ゝ志づゝる身とゝりけゝとゝ太宗皇帝と賛ゝる題ゝ

聖皇自長生殿
に在せば蓬莱王母が家に向とも不
仕

仁い秋津洲之外に
流恵い筑波山之
陰より茂淵變じて
瀬と作之聲寂寂
として口を閉沙長
して巖と為之頌
洋洋として耳に満

聖皇自在長生殿。不向蓬莱王母家

楊衡

帝の徳を賛ゝる仙宮と摸し長生殿と云帝の居處に此壽命長久の殿に在ばわるゝち蓬莱山に向ひ西王母が不老不死の家を尋ゝるも

ちゝぶぬと云心ゝ

仁流秋津洲之外。恵茂筑波山之陰

淵變作瀬之聲寂寂閉口沙長為巖之頌洋洋満耳

紀淑望

延喜の御時躬恒貫之忠岑友則四人に古今和哥集とゝまれ其中貫之規模の人にてゝゝ仮名序を書又其文の或説に淑望にゝりて父紀納言長谷雄卿書のゝと云此句延喜の帝をいやゝそまるゝ仁い帝の仁徳にてゝゝ神武天皇日本の地形ゝゝ似ゝう西い頭東い尾南北い羽ゝとのまひゝよゝ日本紀にゝゞ蜻蛉い和名

梁元の昔の遊。春王之月漸落。周

ゑぞくん秋津虫とも云洲ハ国と云義そのかゝりまでも仁がなかる
と云へ洲とハよりて流と云しぞ筑波山ハ常陸にありきらめて
しげきさ山也へ帝の恵みの山より茂しと云陰と云しハ筑波根のこの
もかのもにかげハあれどとよめるをおもひて仮名序にあまねきおほん
いつくしみの波やしまの外までながれひろきおほんめぐみのかげつく
ばやまのふもとよりもしげくと書るを摸せり淵変じて瀬とな
る世の中ハ何か常なるあすか川きのふの淵ぞけふハせとなるといふ
を取るり我君の御代ハ常盤にましませバふちせとかはる哥の
声ハなく寂々と口を閉てとなへずとこゝろよりのいはひてかを
寂々とおさまり砂長じていはほとなるハ君が代ハ千代に八千代をさゞ
れ石のいはほとなりて苔のむすまでと云哥をとる頌ハいはひうた
なり洋々ハみち〳〵さかんなり今かゝる無為の世なれバ石のいはほと
なるいはひ哥のミ耳にみちて聞ゆると也論語に洋々乎盈耳と云
文をとるか序に今ハあすか川のせになる恨もきこえずさゞれいしの
巌となる歓のミぞ
あるべきとかけり

梁元昔遊春王之月漸落。周穆新會

穆の新なる會。西母之雲歸と欲

政を布之庭ハ風流未必しも崑閬に於敷(未)。之を兼者ハ此地也。文を好之世ハ徳化未必しも黄炎より(王)光(未)。之を兼者ハ我君也

西母之雲欲歸

菅三品

村上帝仁壽殿にて詩の序ハ宴席の末にのぞめる心を作まり梁
の元帝春王臺を建つゝみによ遊びのみを今の御遊に比して云
春王左傳の字なりハ臺によるぞら春の月やうやうかたぶき夜深るを云周
の穆王徳いますり西へ西王母感じてつひに雲にのりて来雲にのりる
仙女に會なる希有のこと也へ新と云今に比し裡るゝ夜あけんと
して王母もやゞて辞し去かゝるきの雲を促しかへるこゝろをよそへ

布政之庭。風流未必敵於崑閬。兼之者此地也。好文之世。徳化未必光于黄炎。兼之者我君也

菅三品

大炊の御門の南堀河の西に冷泉院と云御所あり村上帝の
御時こゝに宴會の序なり上の句ハ所のありさま美々しきとかや
下の句ハ君の徳をあはせ政を布行ひ天下を治ることをのゝ支とす
るを布政の庭と作り崑崙山に閬鳳臺あり仙人の居処へ帝王の

栄啓期之三樂を歌しも。未常樂門に到未皇甫謐之百王を述しそ。猶法皇之道に暗

玉扆日に臨で文鳳見。紅旗風に巻

居処とても世の政をのミ専としめへバ茅茨きらずの蓬蒲庵に生トせども質朴するのミにて風流覚闕なひとしきわどのてにいるのなも

のとて此処にて政事ともの下上に風流をも兼らまさりとて此地にれ冷泉院ハ又文章を好めの君ハ唯風雅のミを専とせさく明徳聖

化昔の賢王のごとれいらるを我君こそ文と徳と兼あひて黄帝炎帝神農のことの化を光しめふとなり

栄啓期之歌三樂。未到常樂之門。皇甫謐之述百王。猶暗法皇之道 後江相公

圓融院の御時法華経二十八品の詩哥を人々に作らしめの序なり栄啓期三の楽をとこひしかども世間有漏の楽にていまだ出世無漏

の常楽をバ知ざりし常楽とハ四徳波羅密の中の二徳へ三楽ハ前巻酒の詩に釈す皇甫謐帝王世時記を作百王の治乱を述た

まへども無上法皇の道ハ辨へざりしと太上法皇円融をとほそ

そてまつりし詞へ帝王世時記本邦へ船来せるやきしれ

玉扆日臨文鳳見。紅旗風巻畫龍揚

て畫龍揚

刑鞭蒲朽て螢空去。諫鼓苔深して鳥驚不

太極殿の朝拜のやうを作まり玉扆とハ帝の御後に立る屏風のごとれものへ緋素のごとれ屏風斧の文を畫て威を示す　藤原伊周

天子の居処へと玉ハわめて云字へ文鳳ハ帝の御衣の織文をも云へ

玉扆に日がさして文にすへる鳳のさらがあれらふミゆるとも朝拜

の庭るい紅の旗を建る風のふきまく時ハ畫きたる龍が

あぐるごとし太極殿の庭に建四神の青龍の旗るどのさまへ

刑鞭蒲朽螢空去。諫鼓苔深鳥不驚

無為にしく治と云題へ罪人をうつ鞭を刑鞭と云劉寛字　江相公

ハ文饒あやミを深き人にて蒲を鞭とする罪人の脊をなでらしまうせ

し後漢書に出仁君上に在せバ民をぢを知て罪を犯さバ蒲のむち

もいたづらに朽螢となりて去と月令に腐草化為螢とあつて螢ハくさ

きさる草より生ずる上にわる臣政道に私あまバ民これを愁許んとすれ

ども其意君に達せバ帝堯こまじがためふ門外に諫の鼓をうけられ

を敲べうづうし聴のいんとえ世治り民うたまへあけれバうつもの

なし苔むしてふるに下り居鳥もはぐくに音あれバ驚ざるへ

古今
鍜治深よ嘆やるの花をぎのりとそるえべと嘆やうのそな　王仁

応神天皇第四の皇子大鷦鷯の御門仁徳帝と申其御弟宇治
の住の宮を菟道稚郎子と称し御父の愛子ゆゑ崩御の時に御位を
ゆづりたまふ仁徳難波津の宮に居給ふをもつて御兄おほさざとあれた
仁徳の御父の命にそむきたまひ譲ひ三とせ二なりけるあひだ宇治の
宮薨ぬるひけり此時王仁今の御位をつぎたまふと哥ようそ難波津
に冬ごもりせしこの花も咲くやこの花と仁徳の難波の宮に居たまふを冬ごもり
と云へり今は春べとの冬去てくるの主となるこころ〳〵きくやこの花と世を
保ち波風を治め民の愁を萌出る春ふかしめぐみのあとに兄花は梅
花の兄と　応神十六年二月朔日に百済王の子王仁
来朝すとあり難波の宮の師となりて仕へたまつりし

親王

親王

春の来るこのこころあるものされど千ぢの松八千代
万木の花いろいろども又来る春のこのこころあるものされど千ぢの松八千代
の椿とりわけ限りなきあるべき君が代いはうがりあるまじけるこの花のちい
君をとのまんと此御哥は天皇の親王をおもひける
時なりとまたせのくるうん寄花祝のこころとぞ

小松天皇

庫車軟輦の貴
公主香衫細馬の
豪家郎

東平蒼之雅量
なる寧漢皇褒貴
無雙之弟二非哉
桂陽鑠之文辭あ
る亦是齊帝寵
愛第八之子也

庫車軟輦貴公主香衫細馬豪家郎

楽府牡丹芳の文して唐の西明寺に牡丹の花多きを貴人きそひ白
あつまりて詩びけり天下こぞりてふかく農業を忘れ元和の天子は農夫
を心とするゆゑ此人々花を愛とる心と退けて君の御心と同じ〳〵ん
帝者のくるま軟輦いとげのち貴公主の帝王の御女香衫いろいろ
なりて細馬いよいよ馬百人ふすぐるを豪と云へり富有の義なり豪
家は福有貴人の家郎はおのこ
公主ゆゑ帝王の車をのたまひ

東平蒼之雅量寧非漢皇褒貴無雙
之弟二哉桂陽鑠之文辭亦是齊帝寵
愛第八之子也

菅三品

冷泉院の親王をもつて孝経を讀のち詩序に詩は文章に巧なると称
美しそまるとて昔の親王を引て今になぞらへ東平の献王名は蒼少

江都之勁捷也。七尺の屏風其徒高。淮南之神仙也。一旦乗雲而何益

巻を開て已に知子為の道。秋の風に悵望す鼎湖の雲

我王の孝行先何に到。梧岫の秋の風一片の煙

此花は是人間の種ふ非瓊樹枝頭

さう孝友の賢者にて寛仁弘雅にして東観漢記に出たる人物なるべしなんぞ漢の明帝褒美貴寵双なき弟にあらざるや北齊の文帝第八の王子名鑠桂陽に封ぜらる文辞の才賢き人にて父帝にさざるる愛子なり

江都之好勁捷也。七尺屏風其徒高。淮南之求神仙也。一旦乗雲而何益

親王入学の詩序に王とをわめ昔の王とそ〜うる句に此次の順句に王をわめてあまとも譏る句に集に入るに古の江都王いちら勁身捷七尺の屏風とこびこ人の及ぬことをせ〜まこが勁極なるを為ず

釈に出空を飛うけ已も後ろ蜀巖と云処に頭白して落ぬさんべ一旦雲に乗ても何ろうせんとあり

淮南王劉安仙を得て雲の詩の

開巻已知為子道。秋風悵望鼎湖雲

冷泉院第七の親王孝経を讀と云を依て孝経に曾子の保胤書て孔子より傳る孝の道と説〜此巻をひらきよめ子と〜

親に奉ずる道を知る鼎湖に黄帝の御墓ある処にて秋風吹くものかなしきに悵望と云て先帝を恋ひ逐悲のあまりをうて云黄帝首陽山の銅にて荊山のふもとにて鼎と鑄のひけるに白龍降てこれに住帝を迎へ員に天に昇る近臣ども龍の足尾にすがり取付て七十余人天上す龍の鬚にとり付て二人半天にいたり鬚ぬけて地に落ける黄帝の弓も其處に落ける孝武本記に出其処の湖を鼎湖と名づけ祠をたてる黄帝の墓にて和漢ともに怪異をつくる古跡いとあらたなる

我王孝行先何到。梧岫秋風一片煙

是も上ふに親王の御弟にて孝経とよまれし時の依る菅雅規舜帝蒼梧に崩じ給ひ陵あり岫山のくさ梧に乃蒼梧なり我親王孝養の御心ゆゑにかくいとうのかと思へば先帝冷泉院と云ひ御墓所を梧岫ふよせて秋の風に一片の煙うちなびきたるむかしをえやう是ぞ昔の名残と思召らんと云

そうして句意前の詩に似たり

此花非是人間種。瓊樹枝頭第二花

第二の花

此花は是人間の種に非。再平臺一片の霞に養まと

此花非是人間種再養平臺一片霞

王孫入学の詩の名花が閑る軒に咲る題へ王孫の宮と崑崙山の仙宮に比し瓊樹の名花は人間の種にあらずと云て王孫の凡種にもまさぬと云瓊はあきらかに仙宮に瓊樹あり

後江相公

第二の花とは第二の御子にてまさるべし

菅三品

前と同座の詩へ意も似たり（平基は秦の始皇沙丘に造る処）後梁の孝王の所居へ漢書に出花は霞に養へ意もあまたがたし云て王孫なれば王子の御子二重の心を再の字にあらわす○江の相公朝綱は老儒菅三品文時は若年の秀才一座の會に暗に同句を作へ

拾遺

いとなるやとへのをぶねのたえぬこそ多くのなみの忘まとは　達磨

詞ざさに聖徳太子片岡山の辺道人の家におもむけふ飢る人ありの臥り太子の乗の馬とぶまりて行ずむちをあげて打のどもちろ（退きく）太子則馬より下て飢る人のもとへふすくまひて紫のうへの御衣をぬぎ飢人の上にかけ哥をよみてのまつ〳〵もなりて片岡山の飯に飢てふせる旅人あはれ〳〵飢人首をもたげ御返をとてまつると云〳〵片岡山は大和の国道人太子傳

丞相付執政

季文子が妾不衣帛と衣不。魯人以美談と爲。公孫弘が身に布被を服る汲黯其詐多を

ふもとの飢人を元亨釈書に達磨とあり太子の御哥支那照那に片岡山の枕詞なる旅人に飢人とあり汝親なくあるゆゑにやとへ返哥に班鳩に太子の宮所其地に富の小川あり古へ未来末代絶まじく太子をきして正〳〵あるべきと云ざきとあるべし法皇なれば大君と云〳〵富の小河の流さえざるべし太子の御名をば忘るまじきとあり哥の表へ裏のとらへつるべし太子の御て富の小河に太子弘通の法水さえいでて慈尊三會のあるまでもとえまつべきと我大君の御名とは其法水の流行とあるべし

丞相付執政

丞相（日本の大臣執政に摂政関白と云漢の武帝の時始て左右の丞相をおく

季文子妾不衣帛魯人以爲美談公孫弘身服布被汲黯譏其多詐

後漢書文

魯の昭公の相季孫行父と云利を貪らず君に忠を尽せ一人を家に帛を衣る妾あり厩に粟を食ふ馬あり府に金玉なし

識

百里奚食を道路に於乞て。穆公之に委ぬに政を以す。寗戚子牛を車下に於飼て。桓公之に任するに國を以す

文子は謚なり左傳史記に出魯国の人なり美談とす左氏なり季文子をさしてあきらかに章を断て義を取るなれば言を以てこゝろを害べからず漢の丞相公孫弘は孝武帝の大臣にて富貴の人なれども財宝を惜みむさぼりて外は賢人のさまに布の被を服すと漢書に出汲黯字は長孺淮陽の人にて直く実有人なり汲直と云し此公孫弘を実の賢人にあらずとて人目をかざりて偽多く実すくなしとそしりけるとぞ

百里奚乞食於道路穆公委之以政

寗戚子飼牛於車下桓公任之以國

百里奚は周の時虞の国の大夫なりしが君を諌て用ひられず〔漢書文〕立のき後貧なりければ道のほとりに食を乞しを秦の穆公其賢を聞て迎へ国の政を委ねられけるに大に国を強くし列国に威をふるひ虞の君は其諌を用ひず晋にほろぼされたり史記に出寗戚斉の桓公の賢なるを知て仕んと思へども便を得ず商人となり車を肩て桓公の門にやどりけるに公客を迎あるとて門をひらき寗が車をとゞめひのけるに其時牛の角をたゝき哥てうたふ南山燦々白石爛々中有鯉魚生不遭堯與舜禪短布單衣纔至骭長夜漫々何時旦微牛苦々何眈駕矣桓公此哥は凡人にあらずと召て後車にのせかへり大臣となし国のことを任せられ果して賢者なりとぞ三齊畧記其外諸書に出寗戚子などの子は男をいふと

孫弘が閤開しく閑客無く傅說が舟忙くして人に借さず

西京の席門は乃ち是陳丞相の舊宅なり南山の芝澗は

孫弘閤開無閑客傅說舟忙不借人

裴氏司空ら興化と云処の池辺にある亭に宿り静閑に山水を〔白〕めであそびしことを作る漢の丞相公孫弘東閣をひらき賢人をまねきけり後平津侯に封ぜられ此故支をいへり閤は小門なり傅說が事章の詩に出殷の武丁相として巨川をわたらば汝を舟檝と為さいへり此故支にて舟と作る孫弘傳說なる丞相にてそびえけれど今裴司空のごとく舟をうて客をあそばしむるに似ざるなりとかなへ

西京席門乃是陳丞相之舊宅南山

芝澗寧非袁司徒之幽栖

後江相公

寧袁司徒之幽栖に非や

周公旦者文王之子武王之弟。自其貴を知り。忠仁公者皇帝之祖皇后之父。世に其仁を推

周公旦者文王之子武王之弟。自知其貴。忠仁公者皇帝之祖皇后之父。世推其仁

菅三品

小野宮閑白実頼公清慎公摂政を辞し給へる第三の表に漢の丞相陳平が家貧しく黄老の学をこのみ其家西京に在しに席を以て門とせしと漢書にあるされば旧宅を作りそ漢の表安字に邵公世を遁れ南山に竜居し芝澗に草生るたうのこころなり

後つかへて司徒三公に昇ること世の政をとりて国家を思ひ給へ世びぬ泣けり蒙求に出此表の心右両人のごとくもむかしの門ぢのさまにそなへ栖るためにあまこの清慎公実頼公のもとの名

そのごとく閑居を好むこと

小一条太政大臣忠平公諡を貞信公と称す摂政辞退の表と文時卿書す史記に周公旦のいはく我文王の子武王の弟成王の叔父我於天下亦不賤と有と自其貴きことを知と作もう忠仁公に深殿太政大臣良房公の諡なり此御女明子に文徳天皇の皇后そ

傳氏巖之嵐雖風雲於殷夢之後嚴陵瀬之水猶涇渭於漢聘之初

菅三品

一條雅信公左大臣と辞しの表文を書まるる傳氏巖に前巻草の詩に釈を風雲に物相ることを心て帝王のことを臣に有ひのごとく雲の風に有ごと殷の武丁高宗賢臣を夢て傳説を得る感曾とに嚴陵瀬に後漢の光武帝いまだ位につかざる時の友に嚴光字に子陵と志ある人あり帝位に登りのひていらるも賞せらるるを思ひ子陵孤亭山のわくらかに釣をられてあそびける其ころ天変あり天文官奏しく君故人を求るの怪異なり帝こと嚴子陵なるとと三びまで

傳氏巖之嵐は殷夢之後に於風雲水に猶漢聘之初に於涇渭ごと

染殿の后と号し清和天皇を生ひ奉る清和帝の御外祖なるを以て摂政として仁恵浅からざりしかば世にあるべく其徳を知るこの義に周公旦は成王の幼少なるしあるに摂政のひ忠仁公に清和帝七才にて位に即せのひしを御母方の祖にて摂政

春去夏闌て袁司徒之家の雪ハ路達應且ハ南暮ハ北。鄭太尉之溪の風ハ人ハ知被ハ

聘使あまたゝび辞しけるに帝其上處に往てゝ其のゝ八子陵高く卧て起ず床のもとにおりて腹をなでゝ子陵をなんぞ恨る朕さしにてこそんずとのたまひ同車して皈り是より陵とともに卧ひるに陵足を以て帝の御腹の上にあをけとゝ太史奏して客星御座を犯ずと帝のたまひく故人子陵に苦しかりし処と嚴陵瀨と号しけり涇水に清渭水に濁る三さゝび勅をくだし又に同車しあひ背きあひ

春去夏闌袁司徒之家雪應路達旦

南暮北鄭太尉之溪風被人知　同上

上と同じ文に春もすでに夏もなりぬれとゝ今に袁司徒が門の雪きえて路をゝけまゝ彼をとゝ出さるゝ袁安らゝに三章前に釈り且に南風吹暮に北に鄭太尉が溪の風世にかまたく人をまもるゝ彼二人の賢者をゝ愚身いとまたまいゝと云意に漢の時大雪一丈余つもる洛陽の令奉行をゝ袁安が宿にもゝ雪をゝ袁安倒れ死ぬとゝ思て雪をゝ掃ひ除かしめ袁安ゝ人ゝ死ぬと問ハ大雪にて人ゝ飢ゝ我ひとり然ざるやと答けり其賢にて世に聞ゆる司徒にいる後漢書録異傳に出ゝ鄭弘字い巨君會稽山陰の人ゝ其家溪の南にあり其北にある白鶴山に新を樵けり其谷を君耶溪といふ船にて此溪川をわたるに風波あらく漕ぐ〳〵と限なり或時山にて矢を拾ふ者ゝ〳〵あり我叶人と弘がいつ我さきゝけるを出してやりゝ汝思ふことあゝ〳〵我叶人と弘がいつ我さきゝをゝ〳〵て此川を渉ふ風の定らざるとゝ異人がいゝ我此山の神ゝ朝に南風を吹せて送り暮に北風にて吹送らゝめんとて去ゝり其後朝に南夕に北より吹風定り舟行安し今もなを然り と云帝聞て官を太尉にの人大日本の大改大臣ふひゝ〳〵支に後漢書傳に出

續古今

心懸あくまでをしとゝるれもちるべき風吹ぬ世に　兼盛

清慎公関白実頼公月輪寺の花見の時の哥にて公の政事さゝきをゝめるゝにて丞相の部に入技をゝ〳〵ゝ〳〵の風も吹ぬ世にあひ山ざくゝをあくまでゝとゝるゝと悦ゝ又一条禪閤に清慎公の哥ゝ〳〵

将軍

三尺の劔の光と
氷手に在一張の
弓の勢い月心に
當まり

雪中ふ馬を放て
朝に跡を尋。雲
外に鴻を聞く
夜聲を射

将軍

将いひきゆるゝ二万五千人を軍と云ふ〜三軍をひきゆるゝどゝ數多の兵をゝぶく乱国を征の職なり

三尺劔光氷在手一張弓勢月當心

武士の形勢を云〜三尺の劔い漢の高祖の故支前ふの帝の詩 陸将軍

釈す又呉の季札の劔霜のごゝ氷のごとしとあり劔のさゝるいろ

に張る弓い半月に似ゝ胸のまゝに横ゝ

たまび月心に當と作まり李都使に贈る詩ゝ

雪中放馬朝尋跡雲外聞鴻夜射聲

武士のことを作まり周の時齊の桓公北の方孤竹とゝを征〜 白

ゝふ大雪ゝう道をうしるひ多く從兵道をゝ〜び飢ることを得ず

上卿に管夷吾名仲 顔水の人ゝ才發の臣にて老る馬をゝかりて

さゝぐゝ〜其言にゝゝがつて古郷の道を得ゝう韓非子に出

魏王の臣更嬴と云い虚發とて虚空に矢を發て鳥をゝるの妙

技あり王の前にて厂の東より南ゝる声をきゝやがて射落ゝう

ゝふ将軍の才と藝とを作まり

鴻い厂の大ゝるの一本ゝる鴻と雁に作

千里往來征馬疲。十年離別故人稀

馬疲。十年離別
して故人稀ゝう

隴山雲暗李將
軍之家に在〜と
き。顔水浪閑ゝう
蔡征虜之未仕
㊋ゝた

千里往來征馬疲。十年離別故人稀

河東の虞氏の将軍遠き国に下り居ゝ贈る詩ゝ遠き道を 許渾

往来来征馬疲ゝる他国に年を経て知人稀ゝ

隴山雲暗李將軍之在家顔水浪閑

蔡征虜之未仕

菅三品

清慎公〜前に委出 左大将を辞せ〜表ゝ漢書に武帝の時李廣貳師

将軍とゝう大宛をたゝ〜げ隴西に辺土を守居ゝしとあり隴山

い其處の山にて雲深き心を云十洲記に夏禹王のとき荆州に蔡

辛と云ものあり賢にて学を好相の官をのゝんと在〜を辞〜く

云堯舜の世ゝに罰きびゝて民ゝのゝう人盗やず〜て食を迄

ゝびゝの二帝い心大ゝること虚空のごゝ徳天地とひゝ君い

御心ゝゝ〜大事をゝすまゝ罰をれども罪人ゝずか

ゝる世に封食せんと我心にあゝびと深山に入けり禹王駐〜七日食

しものゝびゝ此人顔水にかゝまゝ居ゝれば浪閑と云・蔡征虜是なり

一説に文選五臣註に李蔡軽将軍ゝ〜〜大将軍にゝゝるゝび左

職虎牙ニ列〻〻武勇を漢の四七の
將ニ於拉と雖學
麟角を抽て遂ニ
文章を魯の二十
篇ニ於味

賢王の塞を擊こん征虜の義ありとぞ征いうつ虜い名びすぞ
表のこゝろい左大將い武官ゆ名世ニうゝ武士ぐもあまぐ彼をつゝひ
ゝ我い辞をぐさ
との義ありう

職列虎牙雖拉武勇於漢四七將學
抽麟角遂味文章於魯二十篇

順

右親衛藤亜將〻〻〻論語をとゝむの序ゝ虎牙い近衛府なう
大將君の左右ニ侍い虎ニ牙あゝごゝきゆゑゝろ云後漢の孝武帝
二十八人の將軍あつゝ王莽をほろぼゝう其四七二十八人の將
ともものゝうずとさゝるゝろを拉と云聖人の世ニ出る麒麟い額
ニッの角あり仁獸ゝゝつゆニ出ざるゆゑ希ゝるものとの
角ニゝゝ麟角ゝゝ学ぶゝの牛毛ゝう名げく得ゝるものい
麟角ゝうもゝろゝと云本文九經畧ニゝゝう此ゝう藤將軍
の文章を麟角ゝゝ抽ゝ篇い論語ゝう武官み
在ゝ文道を
嗜ゝ美ゝゝ

雄劍腰に在拔ば
則秋の霜三尺雌
黃口自す。吟ずれ
ば亦寒玉一聲

雄劍在腰拔則秋霜三尺雌黃自口。
吟亦寒玉一聲

順

天暦の御時後撰集撰ゝべき義ありて能宣元輔望城時文源
の順等五人梨壺におゝき謙德公伊尹藏人少將ゝ和哥所の
別當ふゝ〻ひゝるゝ震筆の宣旨の奉行の文を順書ゝる
于將莫耶雌雄の劍の古事ゝてゝきつゝるゝと云ゝゝゝ雄の
字とのちひゝゝ呉王莫耶をゝて劍とつゝゝゝゝゝと鉄とを
二枚をつゝ一枚を私ゝゝす王の劍鳴あゝゝんで故を問或
臣ゝいゝ是ゝい雌劍ゝゝゝゝ雄劍あゝゝ王莫耶を誅す
又云呉の季札ゝ劍霜雪のごゝとあゝい漢高三尺の劍と
云ゝゝゝ武官太刀とゝけゝゝと云句ゝゝ雌黃い玉の名ゝ
王衍ゝ詞雌黃のごゝゝゝゝ口弁ゝゝゝゝゝゝ云ゝゝゝい和
哥文章ハ口ゝう玉を吐ごゝゝゝゝ寒玉一声いゝゝゝゝ声
あゝと云孫興天台山の賦を友ニ示すゝゝゝゝゝゝ地ニ拋
心金玉の声ゝ
べゝと云ゝゝゝう

蚰ハ劔の影ニ驚て便死を逃。馬ハ衣の香を悪で人を嚙んと欲す

蚰驚劔影便逃死　馬悪衣香欲嚙人　都良香

将軍の威をおそるゝ夏の禹王江を渡るの時黒龍舟をさしはさまむとすることを得ざりけるに禹王劔を打つれハ蚰ハ劔のかげをみて逃去りし崔豹が古今註ニ出魏の文帝ハ馬を愛しけるの狩ニ出んとて馬とひたせ朱建平と云相者ニみせしかバ此馬うまぶを今死すべき相ありと云しに信ぜず乗んとせられし時御衣の香しけれにおどろきて帝の膝をかむ怒て切殺す

後撰　玉くしげふたとせあはぬ君が身をあけながらやはあらんと思ひし　公忠

朱雀院天慶年中伊豫守藤原純友叛逆を企る討手として小野好古少将追捕凶賊使をうけて西国へ下り二とせまで四位にあるべきを左もあらざるとよめる玉匣ハ箱のことなりひけるがらなしと云ん料ニ置し枕詞なり二とせあはざりし君今五位の緋の袍をきながらわんとハ思はざりし四位ニ叙して㩲なるべきを云心をそやハしと云へ好古より返事ニよみけり之

刺史

刺史

受領を云国守の唐名也後漢書ニ外十二州毎州刺史一人六百石とあり武帝初て置り

士女の笙歌ハ月の下ニ宜し。使君の金紫ハ花の前ニ称ふ

士女笙歌宜月下　使君金紫称花前　白

春の部霞の詩霞光曙後と云ふ詩の句にて早春蘇州の夢得ニ寄るとて蘇州へ召具しける士女倡女のが笙を吹きうたひするを月の下にありしろきと使君ハ受領之夢得を云ふ金印紫綬ハ高官三公なぞのまとしなるが貴む心なり用ゆそりまた衣裳の飾ともすべ花の前ニ威儀をつくのひ称りとおもへる之

精明ハ合浦の珠ニ相似たり。断割ハ昆吾の劔も如かず

精明合浦珠相似　断割昆吾劔不如　白

李尚書に贈詩にて政をおさむる心の精く明らかなること合浦の玉に似たると云珠の故事月の詩ニ出民の訟をことわりさばくつてハ昆吾の劔にて物を切ようなると云越王勾践昆吾山の銅のいろ火のごときを得て白馬を以て山神をまつり欽冶子ニ八ツの劔を鋳させ第八の劔を直剛と名付るに金玉土木をきりけると呉越春秋ニ出又周の穆王に昆吾の人劔を奉る玉を切こと泥のごとし

三百盃と雖強ニ辞すると莫邉土

雖三百盃莫強辞　邉土不是酔郷此

い是醉鄉なり不
此一兩句い重て
詠可北陸い豈
亦詩の國なりや

史を詠ず

一兩句可重詠北陸豈亦詩國

保胤

源の順註登守として下る時餞の序に三百盃のこと餞別の詩に
出辺土い醉鄉なりしに酒い友にあひ興を催してこそあり
ろに鄙にて酒とのまん友もあらじとて辞すに飲のこと人
なり足下の今日なに能登い北陸道なるにいとも詩の境まあり
此にてそいくらぶも重に
詠吟せよとのこころ

新古今
ちぬ風ぬぬぬてをぬ煙ぬ民のかまどい賑ひにけり　仁德天皇

仁德天皇四年二月樓に登り四方を望に民疲朝夕の煙もなし
くに三年民を休め宮殿破るまでも修理をとゞめ
七年の四月又樓閣にのぼり御賢まします百姓のゆたかなる
へると悅びあひ詠ずに竈い唯人家のこと田里を安んず民の愁苦
と止め天子と治をとゝふ
すに刺史の勤也此部に入

詠史

史いに史書の
故事と題し賦す

燈暗數行虞氏淚夜濺四面楚歌聲

燈暗して數行
虞氏が淚。夜
濺四面楚歌の
聲

燈暗數行虞氏淚夜濺四面楚歌聲

橋相公

史の項羽本紀を題して詠ず。楚の項羽い天下なくび
なき剛勇の將にして身の長八尺力鼎をあぐ漢の高祖と天下と
爭こと九年七十余度の戰に項羽皆勝けれども張良がこと
韓信彭越などの智にて項羽を垓下と云に數万騎にて囲
夜にけて漢の陣に楚の哥にて声一けにび項羽もろさ楚を
でに漢にくぶり漢のさふ楚の兵多と思ひかとしうひく項羽
竈愛の美人虞氏と几帳のうちに夜酒をのみて
詩を作ていくに力拔山兮氣蓋世時不利兮騅不逝騅
不逝兮可奈何虞兮虞兮奈若何と數へんうたひければ
虞氏なくく和くいく漢兵已畧地四方楚歌声大
王意氣盡賤妾何聊生とくくひけれび項羽もろ
落涙數行ずて秘蔵の名馬烏騅にうちのり東城に落
ゆき漢の將呂馬童王翳など云りのふ計を亡びけりあれを
題くく燈の下に虞氏が別をおくに數行のなみだを流く夜に
けて四方の囲漢兵の中ふ
楚哥の声くくと云

賓雁書を繫く
秋葉落牡羊乳
を期て歳花空

他日遂に秦の
虎口を逃暮年
初て漢の龍顔
に謁す

賓雁繫書秋葉落牡羊期乳歳花空

漢書の蘇武と詠ぜ〻前漢の武帝李陵を大将軍蘇武[紀在昌]を副将軍とし〻北の〻匈奴を討利あ〻ずして〻の二人胡国に〻〻れ李陵は降参せり匈奴蘇武を犯と王相〻せんと云を用ゐんがりつ〻北海のくまに羊を養せ牡羊乳ゐ古郷へ皈さんと云けり蘇武十九年胡地に苦ミ誠忠をいだいて火とうり〻〻厂の足に文をむすびて故郷へ〻くしに漢の帝上林苑に厂を射て文を得ひ蘇武が存命在と〻って匈奴へまつらい〻〻〻放ち帰らむ痩疲す〻〻節を杖てこそ来し此意を依賓厂は胡国北の地より都へ賓客に参る厂と云と其足へ書を繫く時節秋なまゐ木葉落るさまを云牡羊の子を乳いるくれとまるゐ待ても得べ〻ゐ其間は歳月空〻〻〻なゐ去を云蘇武がとい八月十五夜の詩厂の哥の釈なるべし

他日遂逃秦虎口暮年初謁漢龍顔

史記の列傳に出る叔孫通は薛の人なり文学と[紀納言]
りて秦の二世に〻へ陳勝と云りの謀叛せ〻時征伐なる〻と
云〻〻を二世愚うて怒又〻〻ざと叛逆に〻あ〻ゐ盗人なるゐ〻やぐて
所の長吏召捕べ〻と云を二世よろこび帝をのいう賞せらるゐ
謀へ〻と〻孫通は虎口を逃まと云〻〻やぐて去て楚の懐王
に〻のち漢の高祖に〻つ〻え〻り龍顔は雲の詩の釈にくい〻謁
は對面なる〻漢の世治り群臣は宴とのゐ〻軍功をあ〻そひ醉
狂のあまり無礼多〻〻ふ魯の諸生と我門人と朝儀の礼を
稽古させ漢の正月は今の十月なるふ長樂宮にて其礼をおこな
ひ群臣に天子を拜せ〻め法を正しけ〻ゐ酒をのめ〻も喧嘩
して礼をとらしゐふものゐりし高祖吾今日皇帝のたっとさを
ゐまつると悦び太常ふゐ〻さんで〻金五百斤をのひろもべて宗
廟朝廷の儀法こと〻〻叔孫通太常として
論じ著す処〻又他日とゐ〻ゐ以前と云〻ゐ

かぞいろいろにあもれとゐ〻ゐをふなりぬ〻〻ゐして朝綱

日本紀に蛭子を詠ぜ〻吾朝の史ゐ〻詠史の題ゐ〻ゐ〻
神代巻に伊井諾伊井冊の御子蛭子三年まで足〻ずして有
父母は二神をさして云親の御身
ふとうてさぞ憐ゐ〻ゐ〻ゐ〻ゐ

巻之七終

雑

王昭君

愁苦辛勤して顦顇盡。如今却て畫圖の中に似たり

身に化して早胡の朽

和漢朗詠集抄巻之八

雑

王昭君

漢の元帝の宮女王昭君漢の文帝の諱をさけて明君と云王氏の女後宮三千の中弟一の美色なりが匈奴の王單于漢と和睦し女を賜り帝の婿さんと乞三千の美人の中形容醜きをのらんとあまたの一〻見尽しのべたまふあはづして画工毛延壽命て其名〻形を繪ようつさむ美人皆賄賂をおくりけ〻る明妃王昭君い已ぶ美貌を憑でおのづからまづ〻れてふ〻る西〻るうそ竟に胡国に行るのぞんで叡覧おもべ世に希なる美女ゆゑ惜しみのべと綸言汗のごとくめりと匈奴に嫁しぬる

愁苦辛勤顦顇盡如今却似畫圖中

王昭君都を去て遥〻匈奴へ嫁し愁苦辛勤て顦顇おとろへつきぬれば今てい〻つてこそ〻画の〻る畫図に似たり

白

骨と為て家に留く
空漢の荒門と作

翠黛紅顔錦繡
の粧泣沙塞に尋て
家郷を出

邊風吹斷秋の心緒
隴水流添夜の涙行

胡角一聲霜後の夢
漢宮萬里月前の腸

昭君若黄金の賂を
贈い定是終身帝王

身化早為胡朽骨家留空作漢荒門

王昭君の身い胡国ニうづれ朽さる骨と化ること早く家のこ
漢のこやこ〻こまりて空く葦の門とあれてくる死後のさまをとり

紀納言

翠黛紅顔錦繡粧泣尋沙塞出家郷

此詩い一首四韻皆へうう翠の黛紅の顔ニて錦の繡ちる
衣服を粧ひ〻〻泣〻れ〻家郷を立出黄沙の辺塞ニさづみむかへ

後江相公

邊風吹斷秋心緒隴水流添夜涙行

前の胸の句ニ辺塞の風ニ心緒も吹断と云秋の心い愁の字ニ
約る漢と胡のさかい隴山よりいづる川の辺と泣〻たどれば流れ流れ

同前

胡角一聲霜後夢漢宮萬里月前腸

前の腰の句ニ胡うあつきふ角ニて笛をつくそれが耳ニて霜夜の
夢をさます月とそい漢の都と万里ニ思ひやらるさもさるべうる

同前

昭君若贈黄金賂定是終身奉帝王

ふ奉ぜん

身い埋胡塞千重
の雪眼い盡巴山一
點の雲

數行の暗涙い孤雲
の外一點の愁眉い
落月の邊

妓女

前の落句通じて八句一律ニ昭君画工ニ賂をおくらざる
身を終まで漢の帝ニ奉てくるうためうぞくんものと

同前

身埋胡塞千重雪眼盡巴山一點雲

胡塞い北方匈奴をさす雪多さゆゑ千重と云巴山も胡国
と漢地のさかひニ昭君朝夕漢をちさひ巴山の雲と見つるなり

源英明

數行暗涙孤雲外一點愁眉落月邊

美人の眉片月に似うと云憂の心を昭君の顔ニ作るニ都の方ふ
一孤の雲をうゑめ恋〻ニて數行のなみだニ目も暗入さの月ふ古さと

同

うつ〻〻愁の眉とこ〻ニ落月い
夕も暁も山のかたニ入くる月とこり

わりぐきとのぐきとのる時ぐきく〻もあれ松とのぐきなく

宛考

足曳い山とらくん枕言葉足を引つゝのぐる心ニまく人もなれ音と啼い
わりぐきなと云て胡地ニ昭君さび一人數行のなみだと孤雲の外ふとゆあぬきと

妓女

まひびめニ美女管絃歌舞とく〻
ちて酒宴の興ニ弄ニるのなり

容貌似舅潘安仁之外姪氣調如兄

崔季珪之小妹

張文成

張文成と云人唐の皇女に奉りて後〳〵心を思〳〵もそれて色も出さず心一つに歎き過ぐるかく思ふさまを見て遊仙窟の文を作世に弘る世人唯作文と思ひ皇女に我〳〵思ひ〳〵此句は其文をぬき〳〵河のほとりに深山に入思ひ仙宮に至る女に案内を問ふ彼女その所の仙女十娘と云なほ似ると云人とてとぶを託〳〵安仁が外の姪なる色好む男の安仁に逢さうとなると云潘安仁こと春の部雨の詩その外も出此人市をそぐふ色好む女子あつまり珍果を車に投入るを崔琰字い季珪清州東武の人容貌美これとりて仙女とやめとて其小妹にて兄に似るといふ氣調い世俗にきこゆと云こゝろ

外人不識承恩處唯有羅衣染御香

外人に識不恩を承處唯羅衣の御香を染有

嬋娟たる兩鬢秋蟬の翼宛轉たる雙蛾の遠山の色

怪しむ莫紅巾の面を遮て咲ふを春風吹て牡丹の花を綻ス

李延年之族を餝。一妍ふ託て以始て飛。衛子夫之時と待。衆醜ふ在而永異

官詞と云て妓女が帝寵を得る官中のさまを作る我身思寵をうけ〳〵ての人にそもねぬ綺羅の衣裳に君の御染香ぐまろあると人をとぬ心の内ふかりひいでるさまを

元稹

嬋娟兩鬢秋蟬翼宛轉雙蛾遠山色

美女の兩の鬢い嬋娟〳〵秋の蟬の翼に〳〵双ら蛾蚕の眉の宛轉いあとぐるる遠山のいろのごとくなり

白

莫怪紅巾遮面咲春風吹綻牡丹花

妓女が紅巾を面に遮て咲ふと牡丹の花が春風にやとびさるとなり

白

李延年之餝族託一妍以始飛衛子夫之待時在衆醜而永異

野相公

李延年よく舞ければ漢の武帝召て奏しむ其詞に北方有佳人絶世而独立一顧傾人城再顧傾人國とうたひて我妹とやめるふぞ

秋の夜月を待て纔に山を出る清光を望夏の日蓮を思て初て水を穿る紅艶を見

宮人の才色兼ねて粧樓未下詔来添

（未）

武帝召て其美色を愛し李夫人是くさぐの李延年が親族の美を云飾妹一人妍つくして我身も世ふあひ飛で立身もすとい之漢の武帝の皇后衛氏字は子夫と云いと平陽公主の家に謳者として歌うたひ舞しふ武帝公主の家に行幸し具し飯竜し給つゝ后とすべしと時の人歌ていく男を生てよろこぶとすれ女を生てくやむとすれ衛子夫をとゞめと支い史記ふくに賤し身の時を待得て后とすべし衆人のうらくき中より得めひしよび一つに勝てこえ寵も永くとゞまるべと云文

秋夜待月纔望出山之清光夏日思蓮初見穿水之紅艶

菅

宮中の美人粉黛のよそをひを催すを依序の女の化粧して出るさまに秋の月を待て山のうへに出る清光をのぞき夏の池辺に蓮とふるに水の面にたゞめてひらける色紅につやあるを見る心地とえ

筭取宮人才色兼粧樓未下詔來添

雙環且理春雲軟片黛纔成曉月纖

羅袖不遑廻火熨鳳釵還悔鏁香奩

和風先導薫煙出珍重紅房透翠簾

菅

前の序とひとつ詩四韻ふるまろ宮女の中才能あつてうつくしく美色艶容なるを兼ねるを誰れとぞくつて召て其美人化粧してさぞふ樓と下もそてめてなをおそ〳〵と粧樓（宣旨の御使なるを来と添と依りの之

雙環且理春雲軟片黛纔成曉月纖

同

上の胸句の双環い左右のびんづら春雲の髪のうるはしを雲に理いつくろ〳〵軟い髪こゝろ〳〵ぬ之帝よりまろふ召るゝ之

羅袖不遑廻火熨鳳釵還悔鏁香奩

同

上の腰句の綺羅の袖の皺あるとのすべきふまろふ召るゝ之火熨とふるすまふいとまなる鳳凰の形ふつくるる釵をさしたまへとも〳〵香奩をゝくさしてめおさしてゝ之ゝに取出しぐさを悔るかな

和風先導薫煙出珍重紅房透翠簾

翠簾ハ透ことを

嫌らくハ錦帳と褰て長麝と薫ずることを惡らくハ珠簾を卷て晩釵と著ことを

今日の新らたなる饑饕ハ宛ん欲ずと泣先朝舊賜の箏と賣

上の落句ハ上ハ通じ四句の律ハ[illegible]成て妓女の秦 同

[illegible]先其[illegible]薫の香と風[illegible]ちびき出来[illegible]

[illegible]の衣[illegible]翠簾[illegible]透て[illegible]

珍重[illegible]菅家文草[illegible]玉簾[illegible]

嫌褰錦帳長薫麝惡卷珠簾晩著釵

此詩昔より題も作者も[illegible]ず一説ハ菅三品といふ妓女の来る[illegible]を待[illegible]錦の帳と[illegible]げ久[illegible]衣裳ハ麝香と[illegible]

[illegible]釵[illegible]

欲宛今日新饑饕泣賣先朝舊賜箏

老命婦の詩ハ五位以上の女宮中ハ仕[illegible]と命婦と云其老後江相公[illegible]ある説ハ[illegible]三條の命婦ハ若時厚和の帝の恩寵あつく大水滝と云琴をひ[illegible]ると年老てかちぶま其琴を[illegible]饑をなけ[illegible]其[illegible]を作[illegible]云又ハ誰と[illegible]ハ[illegible]て老命婦と題[illegible]今[illegible]の饑と云心[illegible]て新と云饕ハ[illegible]と訓宛ハ[illegible]ハ舊賜ハ[illegible]のまゝの先帝[illegible]箏を代替[illegible]妓女老衰の

遊女

秋水ハ未遊女の佩を鳴ハ寒雲ハ空に望夫山ハ滿

哀とのゝまでハ琴箏通ハ用ゆ実ハ異ハ琴ハ五帝の時ハあり箏ハ秦の蒙恬が作処十三絃今つくハ[illegible]此余風なり

天涯雲

[illegible]ちよをとめの姿をとゝめハ　良峯宗貞

五節の舞姫をとゝてよゝあ天武天皇吉野の宮にをハしける時琴とらせのゝ袖つゝ山ハ天人あま降りまひるとゝ毎年十月舞ひめと虧覽あるこゝろを天女とゝ天の風ハ雲の通路とゝよハ天女をもゝ〳〵とゝ舞のおりゝ其さまハ[illegible]ハを詠り

遊女

秋水未鳴遊女佩寒雲空滿望夫山

賀蘭遲

思ハ処の佳人ハ寄詩ハ佩ハ玉をつゝぬ女の腰ハ[illegible]帯の[illegible]と是ハ秋の水音のゝまゝハ我思ハ人ハ佩とゝして未出さゝぬ寒雲ハむゝ望夫山ハまひき満ゝゝゝと待人の来ざる當意と云て彼女も我と思ハて望夫石のゝくやゝんと思ゝるゝゝ博物志ハ顔崔大將軍ハて秦の国を討ハ行て三年まで帰ざゝハその女恋ゝひて秦のゝハ臨でゝゝゝ終ハ命ゝゝ

翠帳紅閨萬事之禮法異舟中浪上一生之歡會是同

家交江河南北岸心通上下往來船

和琴緩調臨潭月唐櫓高推入水煙

石こうすこれと望夫石と云と日本松浦の望夫石同日の談く

以言

遊女の詩序く伊豫守遠古が任国に侍りふ相ともみ下して川尻に出て作るに翠帳紅閨の内にて嫁るひとさ女のわりさまふ思ひくらぶまいてとぐくわ〜ぬさまおもても舟中浪上にも分み心ぞる歡會い同〜〜〜嫁娶の六礼にて納采問名納吉納徵請期親迎の礼法儀礼に委万叉の礼法くは是く

此詩下に通ず絶句一章にて遊女のさまをつくもる心いわさ〜〜〜るり

源順

水煙に入

老人

昔い京洛聲華の客と爲今い江湖潦倒の翁と作

老眠早覺常に夜を殘病力先

和琴ハ日神天磐戸に隠りたまひ〜時神楽を奏せ〜時弓を同

弓〜べ絃をとりしるにおろひ〜ぎまぎと云六絃く遊女がゆるやに調

〜潭の月をもち臨ち舟にのり檜と推て水上の煙に入しつくるい遊

女すぐく舟つさふ多く唐ふい楓橋漢水のほとり和に江口神崎川

尻ぐ水辺に在く舟に

のり居りのなれ

新古今

白ものしたるなぐさふ月をけくもあまのあい宿ぞびぬ

新古今に題ふ人名〜びとあり渚い海辺に蜑の子やしさ身

なまび宿も夫も定ぬ〜誰とむ〜旅客にあひ〜〜〜〜

老人

礼記曲礼ふ七十を老といく

昔爲京洛聲華客今作江湖潦倒翁

白氏唐の元和中江州司馬に左迁して作るに昔都にて仕へ時栄花白

ふ〜〜も今罪を蒙りて江湖に潦倒て翁とあるに声華いとあやく

老眠早覺常殘夜病力先衰不待年

衰て年を待不

再三汝と憐こと他事に非。天寶の遺民見こと漸稀なり

紅榮黃落を一樹之春の色秋の聲。綬を結簪を抽。一身之壯なる心老の思

老の睡覚ること作まこと老てい霄あわむり曉をまこと目さめるゆ夜久しくのこと明ぐ〳〵気力も身もおこと病ぐちの老の身い明年もまこぬ　白

再三憐汝非他事天寶遺民見漸稀

康氏の叟ふあこる詩こ白氏い唐の八主代宗の太暦七年ふこまれ十六主宜宗の太中元年七十六こて卒す天宝い六主玄宗の年号なり康氏い天宝のころの人こて死しのこと古人こる亡こうせこふ君のこと〳〵あまこが再三おつまこにおりこ　白

紅榮黃落一樹之春色秋聲結綬抽簪一身之壯心老思

菅三品

これい一条左大臣雅信公左大臣と辞せこ表と菅三品の書おここ一れこの木の春い紅こ栄秋い黄落こもうこ一身の若〳〵さこ人なり〳〵こ君こ仕老ぬまこが官と辞一世とのこ心こ綬いひ〳〵ぐこと訓公卿いむこさこの綬とむもこび君こつここ簪とぬこい頭のこざこをとうすつここ世とのこ〳〵心なり一身さこ人なり時い綬とむもこび老ていこんこと抽きてこ思のこぐこといなり

樂天こり於少こて三年。猶已ふ衰之齡也。遊こ一日。是老之幸こ非哉

太公望之周文こ遇渭濱之波面こ疊綺里季之漢惠こ輔。商山之月眉ふ垂

少於樂天三年猶已衰之齡也遊於勝地一日是非老之幸哉

菅三品

山家の部こ出こる尚齒會の序こ見合。貞観年中大納言南淵の年名卿おこなりこと序者刑部卿菅原是善卿なりを此會のこ〳〵ぬと安和二年三月十三日大納言藤原在衡卿こ〳〵行こ菅三品序者そあり本朝二度の會こ白樂天い七十二こて唐の尚齒會こあひ菅三品い六十九こて此朝の會こあひ三年少けまこども猶老衰の身なりこと云なり勝地い此會のこころを云老こまこども七人の老こつこるい幸こいふこものなり

太公望之遇周文渭濱之波疊面綺里季之輔漢惠商山之月垂眉

江匡衡

壽考策の文こ周の文王渭の濱こ狩〳〵こる人史編こていい〳〵今日の狩こ熊こあひ羆こもあず天より君の師を得せ〳〵めこべ〳〵こここして呂子牙が第こ坐て釣をこるこあこて同こ車ふのせこまこりこるこその年老ふび顔の皺を波こここくこもこと作まこ此人武王をこもけ紂王

水は返る夕べ無し流年の
涙。花は豈重ねて春
なし暮齒の粧

林霧に聲を枝とに
ば鶯老ず。岸風に

をうしなはし周八百年の天下をたもちけり綺里季は商山の四皓のその
一人なり雲の部の詩に出見合 漢の高祖の后呂太后と云は惠帝の母
也愛妃戚夫人の腹に趙王如意を生り高祖是を太子に立んとし
給ふ時張良謀を以て商山より太子惠帝の仁孝をしたひ
なりんとの命をのべ礼を厚し詞をひくうして云ければ四人の老人出て
太子の宮に仕へけると或時高祖太子の宮にゆきてこの四人何者と問給へば
東園公甪里先生綺里季夏黄公也秦の乱をさけ商洛山にかくる今
太子の仁孝をしたひてきたり仕ふと帝おどろきて太子の羽翼すでに成
りとて太子をかゆることを止めたまひけり史記にくはし月眉は
ものは白くつの人眉に白毛を生ず白きを月といふ也

水無返夕流年淚。花豈重春暮齒粧

前に出る菅三品の停書也尚齒會の詩也水のながれく
かへらざるに年波の老てかへらぬをたとへ老をなげく句也花はさかりを春 菅三品
ふたゝびも今の時又いとざるとよ老をなし歯のありさまを
暮齒のよそおひとかゝつつくる尚齒會へよそひとさくこそ

林霧枝聲鶯不老。岸風論力柳猶強

力を論ずれば柳
猶強

酔て落花に對す
れば心自靜なり。
眠て餘算を思へば
涙先紅なり

同

上の詩は第三句にて是は其四句也我生はくれ春の鶯よりも老
なりと唱へ雲山鶯とおもひをつゞけり老て力のおとろへたる風に枝ぶり
岸の柳によそへて老衰のさまを云てうぐひすはふべつさられ
ひとへに老ず柳のちらしは我よりやさしとつよ強の字誠に強と兄雅規朝
臣評せられけるを忠朝臣又何の字を用べきとあり雅規
つらく案じてまことにさなりけるといはれしとぞ

醉對落花心自靜。眠思餘算淚先紅

上と同坐の會の詩也酔ながら花のちるをみれば若き時のやうに
いさむ心もなくしづかにかしこの老果たるいくばくの年ふるなるぞ 菅雅規
と餘命をかぞへみるにほど末ちかき思に涙も
まふかなる眠の字は心しづまりいふ心なり

拾遺 ますかゞみそこなる影にむかひゐてみる時にこそしらぬおきなにあふ心ちすれ 躬恒

みる時にこそと云てはじめておどろく心をあらはせりうつりく年
月を送り我おひぬるもしらざりしに今かゞみに向へばむかしのおもかげ
もかはりはて我身とも思はれざるさまにおどろきたる也十寸鏡は
哥書に文字にますかゞみを尺におよぶのことゝ云説あるにや

交友

琴詩酒の友皆
我を拋雪月花
の時最君を憶

陽春の曲調い高
して和し難。淡水の
交情い老て始て知

いづくうゐをびせまし世の中ふ老とをとをぬ人ハせうれば　萬頼

誰しも老人いとゝ世をれいじ方ふ我こゝとよをん
ところもかゝとうちねびゝ心人ゝのゝい助がるゝ

交友

友どち交のうるゝ門をあけうまをを
朋と云心を同じうすると友と云とあり

琴詩酒友皆拋我雪月花時最憶君

白

殷協律と云人とむと江南にて遊ゝこゝど思出ゝうれそのちふ
ゝくしゝ我い琴詩酒の三ッを北窓の友とせゝゝ若き時おもづゝ
の三ッをうつさゝ友も多くしふ老ぬまゞ其友もうゐ見すてゝ我をみげ
うつさわゞ雪月花の興ある時足下のうゝ思ひ出るとあり

陽春曲調高難和淡水交情老始知

張員外か新詩の巻の後に題ゝ元微之ゝ寄ゝ詩ゝ陽春　白
の曲調い郢中の哥の曲ゝ郢い楚のうゝとあて哥を好うゝふゆゑゝ
哥を郢曲ともいうもじめ下里巴人と云曲い和するゝ数千人陽
阿薤露と云曲い和するゝ数百人陽春白雪の曲い和するゝ

昔年我を顧ゝ長
青眼ゝ今日君
ふ逢ゝ已ふ白頭ゝ

蕭會稽之古廣
と過も。託て異代
之交を締。張僕射
之新才を重推ゝ

数十人ゝうなだゞ是其曲ゝ高ゝて和するといふゝ少ゝと文選
ゝあり高ゝて和ゝゝと云是ゝ張十六が詩のおうびゝゝを誉ふ
ゝうひゝゝ君子の交い淡ゝゝ水のゝゝと云本文ゝて淡水の交
情と作ゝ水いうとても淡ゝきあぢうひゝゝとも小人のまゝいい
甘ゝゝてあまぎけゝゝ後次第ゝとて初いぎゝゝ甘ゝれどものちかゝゝゝ味
いゝまゝゝゝ君のゝ昔ゝゝねが淡水のちぎりゝゝと
老の後ゝまゝゝと元微之ゝいゝ

昔年顧我長青眼今日逢君已白頭

許渾

阮籍と云ゝ晋の七賢の内てゝゝき人ゝ青眼を以て
まゝゝゝゝのゝ白眼を以てゝゝ世説晋書ゝ出ちの詩い
狎鷗ゝあゝゝゝてゝゝゝいゝゝゝと云心ふ青眼の二字ゝ少ゝ
すゝゝをゝゝゝ今日我身老てゝゝの友ゝあゝゝ白髪となる

蕭會稽之過古廣託締異代之交張僕射之重新才推爲忘年之友

後江相公

忘年之友と為

裴文籍が後君を聞こと久菅禮部の孤我を見こと新こ

文友の詩序こ會稽の太守蕭氏い呉の季札の賢るしとをさひこ其墓こあそびう世い異るんぐも志と同じくす心を異代のまづりと

つる張氏官僕射日本の大臣るしが才をあいこ有んぐる濟陽の江惣と云年新人るまども才あるゆゑられと年の似ざるも忘れ友とをこ

裴文籍後聞君久菅禮部孤見我新

菅篤茂

渤海国よう裴文璆と云人本朝きこうりくふあくこ已前其父裴文籍ぐこうくる時依者の御父菅丞相詩をわくう

ゆくこあるしを思ひぐこ文籍の後足下のわることを聞わくべきと

ひきこと云我父菅礼部卒こてのち我こうぐこて君ふもぐあてまこ

白こ文籍来こい菅ムいまぐ治部卿こと

白こう唐名礼部尚書るわが菅礼部と云こ

君と別いあるこ後こ契こんむしを世こを去こまりん村上御製

新千載集こい恋の部ふ題よこ人こぐことありまここき友の

きりあきこぬいこる前世の契約あるんまりこと

古今

誰とこを去こ人こせん言葉の花も昔みあるこなくよ　菅原覺

懷舊

黄壤こう誰こ我を知ん白頭こして獨君を憶唯老年の涙と將一こび故人の文こ灑

長夜ふ君先去。殘年我幾何ぞ。秋風袂ふ滿る涙泉下ふ故人多

高砂い山の惣名こ誰をもこの知人まんと思ふい高砂の松ゆ

でいもこのものあれど是も人類こあるんねぐらひをと旧友をもこ

懷舊

懷舊の義こそ

白

の世とものびりこ

黄壤誰知我白頭獨憶君唯將老年

涙一灑故人文

白

前巻文詞の篇ふ出こる遺文三十軸と云句と同時こ故元少君ぐ

文集の後ふ悲のこころをのべ二首の詩を作こう一其一こ黄壤ぬ黄

泉と云に同じこころるつちくこと訓我元少君こをもひ思

ど黄壤こていもこ唯老の涙とのこをる文こそくこうり

長夜君先去殘年我幾何秋風滿袂

涙泉下故人多

白

微之敦詩晦叔と云三人の友相つづで失こうりこをこて二首の詩

をつくこう其一こ一生死長夜い佛語こ長夜のうち君こう先ぐら

往事渺茫都似夢
舊遊零落半歸泉
蘓州船故龍頭暗
王尹橋傾雁齒斜

て去さう我ひとり残りくぶまりて此後いくばくの年とてんやぞて至
べ〜秋風のつゝゝ為一入ものゝ〜かなしぐぐとなるもひとしの友を
うゝまびらる故人とかけて
多〜冥土黄泉の下にあるう

往事渺茫都似夢舊遊零落半歸泉

白氏の友元稹ふ淡水の辺にてゝゝ五年ゆゝ〜夷陵と云処
にてあひ三宿ゝう明〜別に送まゝ若しむ〜のこゝ渺茫ゝ
夢のゆゝれあゞ舊遊〜友ぶら多くい方々へ
零落ゝゝて半い黄泉ゝ帰ゝせゝゝとゝう

白

蘓州船故龍頭暗王尹橋傾雁齒斜

白氏ゝ蘇州の刺史ゝ時のゝゝ舟も今い故てふゝもゝえ
ぬと云んゝそゝとと云龍頭鷁首い舟のゝざゝ名舟と云てふなる
王尹い所の名そゝゝ橋ある厂齒と名づ〜板のゝ〜び厂の齒ゝ
似ゝと象ゝう遊仙窟の文の註にあり古〜ゝう橋もゝふた板
も斜にゝゝ傾
の字ゝ置と云

白

金谷花ふ醉之地
花い春毎ふ匂ども
而主い歸不南樓
月を翫之人。月と
秋與期すれども而
身い何ゝ去

王子晉之仙に昇
。後人祠を候嶺
之月ふ於立羊太
傅之世と早せ。
行客涙を峴山之
雲ふ於墜

月永國字抄　巻之八

金谷醉花之地花毎春匂而主不歸。
南樓翫月之人月與秋期而身何去

右大臣報恩の願文ゝう晋の石季倫花樹と多くうゝて愛
せ金谷園い金水ゝれいづる谷ゝとび名とせるとゝて云へ花いちゝて
春来ゝ毎ゝゝゝゝびゝ咲ゝゝゝ主い又帰ゝゝゝ庾亮字い元規南樓
と建て月とゝてあそびゝ〜とゝて月い秋ゝゝゝゝ移ども眺ゝ人いけもゝ
ゝずゝれゞゝの人〜園の花樓の月と愛ゝる栄耀と捨
死常をゝゝゝ〜菩提にゝりけゝゝゝ

王子晉之昇仙後人立祠於候嶺之
月羊太傅之早世行客墜涙於峴山
之雲

源相規

筑紫安楽寺菅公の廟にて作文ゝし序〜周の代に王子晉仙
人とゝう候氏山に帰来て笙をゝゝゝし処に後人祠をゝゝゝ仙

齡を促良木い其
摧くると歎遺愛の
甘棠い剪ること勿
と謠

家の詩の篇九章目見合べ羊祜字い雍伯（三升子）ことる洛陽安里の人孝心ふく才名あ〜ると太傅とある父母死せ〜ば元終山に葬り父母の為〜そ命いちけれ今生て何らせんと身を投て死も其徳ば碑よ銘ド峴山のつとふ建ら往来の人ふて堕ごるらせ〜ば墜淚碑と名付ら此意と以て菅公の聖廟も支て異なれども王子晋羊祜ぶ跡ふ趣を同じうすと云こふく此序を講ぜる時安楽寺廟震動せ〜と云つふ

促齡良木其摧歎遺愛甘棠勿剪謠

促い迫之催之早世といふて促齡と云良木い死亡せ〜人の英才器量伐譬ら良木いるぐず人に剪ぐらるるのなれば器量ある人の早世と歎を比せ〜荘子ふも文木の柤梨橘柚のぐびい其能を以てを〜ま天年とりつ〜ちて〜ず中道ふて夭すと云意之周の文王の子周公旦弟燕の召公と云い仁徳ふく民とあはれぶひらぐ南国を巡り甘棠の下ふて政をとりのひ〜てあるぐ召公卒〜ふて後大に歎き此木をまもりて蔽芾甘棠勿剪勿伐召伯所茇とうひ〜毛詩を本文とせる遺愛い死亡せ〜人の仁徳

とのことせる意なり召公の休のひ〜木までそこのふてとるのめることを以て失〜人に なぞらへ此詩い哭人のさ〜なり哭いふ〜なるとと訓死喪を吊ふげ〜ふ

古今

いそ〜への野中に求めるほどそこのゆんをるる人でもむ　人もうび

雑の部ふ入ると知まる人に つうい びふ哥ふ恋哥ふ〜ずれとよ〜と思〜水うれびゆるまど汲心なり疎き中うるまどるれのよ〜ふを思ひらぐる義なり此清水播州稲見野にあり當時い清水の里ふて宿ふ〜清冷の水ふ〜ぐ今いめ〜ふりしよ〜詠ふ〜せり

黄ぶぐけと思ぐどかくぐるあやくめるもこつ涙ふる　村上御製

拾遺集ふいふ〜をさ〜ふうけ〜と思ふ〜ぐもとあり九条右大臣師輔公の女安子うせるの時父公ふ〜ふてのふくむ〜をぐうけ〜どふうけてちりひ出ぐと思ふ〜ぐもふのそろふ

拾遺

世の中ふあ〜ま〜うぐとせふ人ふ〜ぐ〜ぐもなりふるうれ　為頼

むしてそぐし人くちわく〳〵すくすくとそのげくをとそくすくり世に生て今もあ〳〵ぶとけ〳〵あ〳〵と思ひ出る人のすくなくるぶ多くなるうつるよとゐげくらろなる

述懷

懷を述べりひとり望のとげざるを悔世の歴ざるを歎息し其ろさまく胸中ふ鬱懷まる処へ

専諸荊卿之感激侯生豫子之投身。心爲恩使命依義輕

後漢書文

専諸ハ吳人之吳の公子光と王僚と中あ〳〵ぶひに相ろうえ〳〵光伍子胥とかく〳〵子胥又専諸とまさく思をうけるあるとろ〳〵専諸謀〳〵王僚をむかへ〳〵僚が軍兵ハ王宮より専諸が家まで道に充〳〵専諸匕首短劍頭匕をあづけ〳〵魚の中に〳〵もむ僚知らず〳〵て食せんとする時専諸匕首をとり王僚を刺ろす臣下らちまちさいぎ〳〵ちてつゐに専諸を討〳〵けり匕首ハ一尺八寸の劍の頭匕に似さり吳の太伯の世家に出荊卿とい荊軻なり秦乃始皇燕の国よりある樊於期と云りのとうくをる燕の太子丹秦乃始皇をうたんをとそくふろ〳〵荊軻と於期とそろりて於期ハそく我太子のそふ命とそく我首を切て始皇にそてまつり其うちとけて語ん処を討〳〵と自ら首を刎て死せり荊軻秦舞陽と云ものと具〳〵其首をとり秦へゆき且燕の国の圖をさゝげ今と此国と君ふてまつんと云るふぞ始皇心とけくるる時荊軻ハさりうう袖をとゝ〳〵刺んとす始皇いろ〳〵今生のいまを乞う一度愛姫の琴をきくんをぞ〳〵のべよとあるさ〳〵の荊軻少〳〵猶豫せまふ彈ぜる曲に羅綺の單衣ハ裂てらべ〳〵八尺の屏風も超てこえつゐ〳〵鹿盧の劍も負て抜つゐ〳〵と始皇ちまち悟りて袖をひきくり屏風を超〳〵のゐれふ臣下さるり荊軻をろ〳〵太子丹と〳〵〳〵侯生い魏の隱士侯嬴と云ものん年七十ありさ貧賤ろりとと魏王の弟信陵君酒をりけくこれをもむ上客とん其ありと式敬もるとゝ〳〵けく又朱亥と云ものとすゐ客とす秦より趙をゝとし時信陵君の姉婚趙の平原君書をおくり魏の国へをゝひをこ〳〵い信陵君救んとまゐるとも其勢少りしに侯生ろりでとなり魏の將軍晉鄙を朱亥ふ鈇推うて打ろさせ其軍勢を引具〳〵てけ〳〵む侯生もをゝひまいへ〳〵ぶ老てゝゝぶと云

て自刎て死そう豫子い晋の大夫豫讓なり智伯の臣さうし趙襄子智伯を殺し其頭に漆ぬり飲器とし豫讓仇を報ぜんとひそふ厠ふかくまつくるふ襄子厠ふ入んとする時ひるがえせしゆえ人を以くもるふ豫讓劔を以あしをぬき殺すべしと忠志ふ感ず免し逐るるもうり豫子又身ふうるしとぬり癩となり炭を飲く癒とうり乞食の躰とうつて橋の下ふうくと襄子をまつ襄子橋をとをくんとするふ馬をまず怪あるもの也ふるさび豫子と得り今い免すべくとある時豫子いう我死とるまず為ぐるい御衣をものつぐ仇と報ぐる心を表し後死とつんと襄子衣とぬぎてあるけう豫子三ゝび躍ゝび刺るふ衣ゝう血流ゝゝえゝう其後ゝゝ劔ゝ伏て死ゝう以上史記ゝ委し此四人恩恵ふ感激し身をなげうち捨しも心い恩のゆゑゝ使を命い義を思ふゆゑゝかゝぬるう卿いさゝゝ生い諸生と云義子い男子の称ゝるつけ字なう

范蠡收責勾踐乘扁舟於五湖咎犯謝罪文公亦逡巡於河上

後漢書文

范蠡責を勾踐ふ收て。扁舟を五湖ふ乘。咎犯罪を文公ふ謝して。亦河上ゝ逡巡ゝう

一説ゝ江澄明ゞ策の文ゝて後漢書をぬふあゝゝと越の范蠡ゞこゝ雲の詩の釈ゝ出責ゝ臣ゝるゝ君ゝ忠を尽しおゝゝゝざるゝ收ゝ仕を辞しゝゝゝゆゑゝ云り扁舟い小舟ゝ晋の文公の舅ゝて臣下の列ゝる男犯又咎犯ゝゝゝゝう姓い狐名い偃字い子犯なり

文公の父献公驪姫ゝ讒ゝまうひ太子申生を殺し文公をもころゝゝ時文公いまゞ名い重耳ゝて公子ゝてあるゝ趙衰咎犯ゝゞ十人の賢士と他国へのゞき十九年ゝ秦の国ゝう文公ゝ迎ゝけ晋の国へ入ゝ位ふ即しゝむ其時河上までいゝうて咎犯ゞ云臣君ふ志ゝゞ天下をめぐまゝる間あやまちあるべし自さへあやまちを存もゝゞ君ゝゝさゝゝ知ものゝ是ゝうゝまものゝんとある文公いゝゝゝ国ゝう足下とゝのゝゝゞるゝゝあゝゝ河伯照覧すべしと璧を河中ゝなげ入ちゝひものゝゝゝと左傳ゝ出逡巡ゝゝちりゝゝゝゝゝれ范蠡咎犯ゝゝ忠臣も君の誅をおそれゝゝと云文ゝゝゝゞ述懐の部ゝ入られけう

翫其磧礫不窺玉淵者未知驪龍之所蟠習其弊邑不視上邦者未知

其磧礫を翫で玉淵を窺不者い未驪龍之蟠所と知ゞ。其弊邑ゝ習て

上邦を視不者い。
未英雄之纏所を
知(未)

人間の禍福い愚よ
して料難世上の風
波い老て禁不

車前ふ驥病で駑
駘逸こう。架上こ
鷹閑うて鳥雀高

英雄之所纏

左太冲

文選呉都賦ふう蜀都賦ふ西蜀の公子山川峩嵯なることを称美せ〜
ゐ此賦うて呉の王孫あぎけり呉都のさんるうゐもと云ることを述
こゝゐ磧礫こゝい浅き水の沙石とあゝいせる貞く玉淵いふき水中
美玉の出る処ゑ驪龍こゝい龍の名なう荘子こ千金の玉い九重の淵
驪龍の頷下こ在と出蜀の公子は常ふ〜〜処此水のあさきぐ〜
我国い玉ある淵のふるきぐ〜ふることゑ〜ずと云心ゑ弊る邑ふすゝ
上国と見ざるい英百人こ雄千人の行歴を処とゑ〜ずと
朝〜心ゑ纏い日の天ふゝゝと日纏と云ぐ〜やぐゑう躔と通ず

人間禍福愚難料世上風波老不禁

人の世の間ふゐるうち何ふゝて禍何こゝて福あゝと云と愚の
身ふ弁料ゝ世を経ゆけが荒き風烈き波をーのぐゆゝて年老ても不禁

白

車前驥病駑駘逸架上鷹閑鳥雀高

賢人世ふゐるゝこゐ愚者英雄ゝると譏ゝてゝると作李秀才こ
寄ゝゝゝ驥い一日千里行駿馬ゝ大夫以上車ふのゝて馬ふひゝ〜もゝ

許渾

白

事事成と無して
身也老ゝ醉郷
去不何ゝ帰と欲

范蠡責を收扁舟
ふ於掉而名を逃
謝安功と辭一孤
雲ふ鞭而志を養

事事無成身也老醉郷不去欲何歸

若き時さまゝの良ふのぞゝも何良をゐもゝと云ゝもゐく身
い老こけゝりゝゝ今ゝゝ何良をゐるさんゝ醉郷を去ずゝてあそん

白

唐のゐゝゝゝ其車ふ用ゝ駿馬が病時い駑駘ゝそゝゝゝあそき馬がゐて
りて逸と思ゝゝ架い鷹がゐてたゝのゝもるゐゝ鷹のつゝゝをおさゐ
て架こゝゐゝゝる時い小鳥羽をのゝて高くゝゝ
是ゐゐよゐ人のゐゐ時いゝ〜きゐゐゝゝゝ

范蠡收責掉於扁舟而逃名謝安辭功鞭孤雲而養志

後江相公

鞭下當在於字

范蠡此篇の二章目ふゝゝゝゝ雲の篇の詩ふゝゝ名をのゝゝい功成
名ゝゝて身ゐゝゝと云晋の謝安字い安石陳の陽夏の人こ常ふ臨安の
山中ふ住一帝召ゝもゝゝず出て仕い功あゝゝを辭一かゝゝと山林まあゝ
ゐゐを孤雲こゐゐふ云ゐゝゝ心のゐふ世とゐゝゝゝ

昇殿は是象外之選也。俗骨は以蓬萊之雲を踏可不
尚書も亦天下之望也。庸才は以て臺閣之月を攀可不
齡顔駟は亞。三代と過而猶沈恨は同五噫と歌而將は去と

とやうのこと云ふ気をいさめ心をとゞめもてなさ此人々のありさま作者相公の御身よりおりゝ心ゆき述懐の篇に入

昇殿是象外之選也。俗骨不可以踏蓬萊之雲。尚書亦天下之望也。庸才不可以攀臺閣之月

橘直幹

直幹が民部大輔をのぞこる申文に殿上を仙宮に比して五位以上に叙して殿上を許さゝい象外のえらびにて其器ふあるに人のこゝ金骨にて仙人の相あるとそ〻び昇殿をゆるさるゝあれ我身俗骨にて仙人洞ふのぞむべきふあゝゞれば蓬萊の雲とふむべゝび尚書弁官に要官にて天下のさそひのぞむべきなるべし庸才の人の身より思ひくべゝびに臺閣は尚書の省をいふ庸は凡なり

齡亞顔駟過三代而猶沈恨同伯鸞
歌五噫而將去

橘正通

親王家宴會の詩序に身のしづめるとうゝる心に漢武故事にいはく漢の武帝郎官の署にて一人の白髮にて何の時郎とるゝや答て姓は顔名は駟文帝の時郎とる何ぞ遷ざるゝや答て文帝は文とるゝ臣は武とこゝに景帝は美とこゝに臣は負こゝ今陛下は少きを好臣は老こゝ此ゆゑに三代に遇ず武帝感じて會稽の太守となる作者の心老の身もつかふ用られずれど我身彼ふつぐ齡にあるゝ三代をすぎて猶沈とそんとくもめ後漢書に梁鴻字は伯鸞平陵の人博学にして家貧東関を出京をすぎ五噫の哥をつくる

噫は於其反恨る声に和訓をげきとよめり其哥ふは〻陟彼北芒兮噫。顧覽帝京兮噫。宮室崔嵬兮噫。人之劬勞兮噫。遼々未央兮噫。噫の字五つあるゆゑに五噫の哥といふ吳ふゆゑる皐伯通家にあるこゝろをば書十余篇とあゝ一去此二度世に用られざるこゝろを作まこゝ○此序を人々怪くが果て正通妻子とひきゐて高麗国にそこゝ重く用らを宰相と成に其のち彼国の商人来こゝ日本の才を重ぜざる国にそこゝ思ふの我邦ふ有りと語りけり一説六条具平親王に奉て書る序に為憲齊名其席ふ在此句を聞て正通に思ふことをべゝるやと云さゝやれる正通こゝて其あつさを日本と去ることゝ

言下暗ふ骨を消する火を生ず。咲の中ふ偸ム人を刺刀を鋭

鬼と一車ふ載くも何ぞ畏ム足ん。巫の三峽ふ棹も未危と爲㊫

楚の三閭が醒る終ム何の益ふある。周の伯夷が饑るも未必も賢ならず㊫

言下暗生消骨火咲中偸鋭刺人刀

人の心表裏あつくなるぐるぐるとを云甘き言と思へば暗身を失春道

ム火を以て骨まで消滅するぐの巧あり咲顔ふうちくまびひそ

ム人をさす刀をとぐぐさ心ざしとさしくまもりてあくれ

ざる世ふ有ムム白氏文集ふ咲中有刀潛殺人と云ムムム

載鬼一車何足畏棹巫三峽未爲危

人の心おそろしくたのむぐぐると云鬼と一車ふ載ふ周易前中書王

睽の卦上九の辞ムムムムムムム易の義

ムあず鬼と車ふつもいおそろしきれども人の心の怖きふくぶれば畏ムふ

足す唐の江州巫山ふ三ツの峽山あり其所の水急ムて舟行ム

ムつづも人の心ム比ムい危ムあくびと云文集大行路ム巫峽水蝕

覆舟若比人心是安流とあり巫峽のム猿の詩ムゆくム

楚三閭醒終何益周伯夷饑未必賢

賢人を賢とする世ム其ひもあム賢人も用られぬ世橘侯草

ム唯世くムうつり身と全せんうれ志と云心とつくとり楚の三閭

の大夫屈原がひとりさめくるも汨羅ム放ムム賢ならうひもあくと云紅葉の

詩厂の詩ふ釈す伯夷ム遼西の孤竹の君の子ム父死する時位を

叔齊伯夷の異母弟ふゆづりくるが兄伯夷ムゆづりて位をさけくり伯夷も父

の命そむくことうまじと弟ムゆづりたがひム去るゆゑ中子位をつざけ

ムム伯叔兄弟周の西伯侯文王の德をあさふふ往て周ふうつた

るに文王の御子武王殷の紂王を伐ものムと諫父の喪ム軍をおこす孝

ムあず下ムて上を討ム忠ムあず人を殺してたのしむ仁ムあず

といさめもひらまず首陽山ふくまム飢死くうれも何のえき臣

と云て世といきぐるる心あり伯夷叔齊ぐ

ムム廣州先賢傳そのうく諸書ふりづ

仁をてみれいるづふ老ふくん年のふつんともやさしく人ちゆ

古今俳諧哥ムムぞやさしくムとありやさしきい耻ムきく

何のなすこともなく打すぎて我るぐくるるくふちぐムム

新古今

老の中ムてもかくてもあるべしムるもるくやもてくるるれば

あざるかりの世い富貴も貧賤も同じ宮殿も茅屋も

果あて住おるムあくびとくくのしい助字なり

慶賀

劍佩曉趍雙鳳闕煙波夜宿一漁船

錢塘國を去ること三千里一道の風光意ふ任て看

きよらかなる世の中よ濁らぬくもすめる月の影原元光

拾遺集ニ法師ニ云ハく住るに清の字をそくり濁る世ふ月いけてきよらかなり多武峯ふこりおこりひすまーくくえ法名如覚

慶賀

我人のよろこびを述るとりへ

劍佩曉趍雙鳳闕煙波夜宿一漁船

白氏九江郡ニ左遷の時江浦ふ宿て元八が官をあらそもるを聞て此詩をとりてへ劍を帶ーー佩をむすび朝廷ニつくる忠臣雖の多くをまちあつさふ内裏ニ趍まいるとき元八がよろこびの心へ呉の時宮ニ鳳凰来あるまし宮ニ帝城を鳳闕とも云双ハ帝王の宮太子の東宮とるら闕と云人さらへ我ハ煙波をものぎ一のするぐらよる船の中ニ夜のやどりとりてむる愁のていを述ハれども上の句へ祝をるとまり

錢塘去國三千里一道風光任意看

想得江南諸父老因君鞭撻子孫多

史部侍郎職侍中著緋初出紫微宮

想得江南の諸父老君ニ因て子孫を鞭撻すること多ーー

史部侍郎侍中を職す。緋を著ーて初て紫微宮ふ出

及弟せーー詩へ塘いつくしむーー一夜大水来て一郡大湖のごーー時の人銭を以て沙石を買るに天下こぞて沙石を負きるーー賣えざるもの又なげすてーー帰まり是を以て一時ようくを築ーーより水のうもとるるしーーハ銭塘と名付此地郡の名江の名ともようぐ章孝標が故国なる事此ところよりー三千里と作まり夫ーー都まで一道の風景を心ニまもせてるると及弟のよろこびをつーーめり

及弟ニハ其学才をとるるらるーーそ朝廷ニ仕る進士試の科に至及べる義へ

章孝標

人の及弟せーを感ずる詩へ楊子江をへぐて江南江北と云こと方ニよりて呼り今江南の人父ーるるの老ーるるの汝ふ学問をよくして及弟せーをそ子孫をもちうさとげまー学をーめんと想ーるるーーーーるる我子ふ学問もさせず呰犢のあのとのくすべきやーーそ

正通

粟田の大臣在衡公ふ式部丞ーて叙爵ーーるる詩へ四韻ーるる入まる史部侍郎ハ式部少輔の唐名なり或云

銀魚の腰底に春の浪を辭し綾鶴の衣間に曉の風に舞

花月一窓の交昔眠雲泥萬里乃眼今窮

躬を省て還て耻相知るこの久きを

或云是式部丞藏人にて叙爵の時の詩なれば吏部郎中とあるべしと
り侍中の藏人職につきぐる〻緋と著たる五位の衣紫微宮の天子の
居給へるに北辰帝坐ふまゝひ藩屏たる衆星のうゝ天と紫微垣
といふうちゞめて五位藏人に補して緋の袍と著て泰内のびゝさに
賀さる〻又一說に式部少輔侍中
兼補の吏部侍郎といふと

銀魚腰底辭春浪綾鶴衣間舞曉風

上の詩の胸句へ殿上人の節會の時魚の袋と腰につくる魚の
うちを銀にて作帶のかざりにつくる金魚袋に金にてつくる魚の浪を
もつて腰の底にあるこゝ綾の文ふ雲鶴を織る
風に吹まうゝと曉風に舞と作て辭去る

同

花月一窓交昔眠雲泥萬里眼今窮

上の詩の腰句へむつ月花と一窓にあそびもまきまゝにくるる
に今君に貴く我いそ天地雲泥とゝゝ自もおぼ心をきはまると云〻

同

省躬還耻相知久君是當初竹馬童

君に是當初竹馬
の童なり

祝

嘉辰令月歡極
無萬歲千秋樂
未央

落句に上に通ト律一章に君とも知身も知られるこの久き
思へばゝづし君におさるれとつゝ竹馬のらゝべすしも今〻栄我い
長年なしうぶも沈そてぬとなり
竹馬の故支前卷ふくい〻出る
新勅撰
むしろ昔の神ふたゝみかうこゝろひゝるもあまりぬる
古今ふうもゝさに何につまん〻衣さりとゆさふそといまゝを
とゝさゝとうけ〻昔いそでにつこゝろ今宵のうもゝさい神ろ
つゝもあへば身ゝもわろうと
よろこびさる賀の部の哥に

同

祝

慶賀と祝このうゝい祝いおゝすてのいひ〻
慶賀い人の悅をゝべ身の上のよろこびと云とい

嘉辰令月歡無極萬歲千秋樂未央

是いうと雜言の詩に英明の作に云江の帥云踏哥の詩なり
聖武天皇天平元年にゝめて中宮と置踏哥をもこのゝと云〻元三
上巳端午ゝすゝと嘉辰令月と云ゝまゝるゝべかゝゝゝゝ盛るゝこゝろ
帝王大臣家ゝゝ御慶賀の時あゝと云てあり学生どゝの列

謝偃

長生殿の裏に
春秋と富。不老門
の前に日月遅

もとゝまりてまゝ此句と訓じ次に音に吟ず
ゆゑして立なりおの〳〵絹四丈と賜なりと云〻

長生殿裏春秋富。不老門前日月遅

天子万年と云を題とす長生殿不老門は天子の居春秋富日月遅は万年の心と云長生殿は華清宮の中にあり程大昌が雍録に云
長生殿は齋殿〻朝元閣に支あるゝ此殿ふりのらをもあるとあり
春秋往来して年と成ゆゑ年齢のてふるゝぞ春秋に富は長壽延
命のひゝ日月おそ〻は不老と云ぞ日月の行道もあるに
年のゝらめくもおそきと云〻唐の殿門の名とゝりたり

天ぐの代は年代をさゞ石のいそとありて苔のむすまでよろづ〻いらん

古今集賀の哥に我君は千代にあり古今六帖に我君は千代にまもりまもせさゞ石のゝあり堯惠云千代や千代と重詞〻八千代にあらず宗祇云りやうてうに栄雅云君は千代に千代をとゝさゞ石のいやとあり苔生まで久しくまもせと云ところ又八千代とよむ説あり

万代とみるさゝ石のうへなるひめ松ことそたのうしし　仲義

戀

君が爲に衣裳に薰もとれども。君蘭麝と聞るゝら馨香るゝ不とおりひ君が爲に容餝と事とすれども。君金翠を見るゝら顔色無とおりゝ

拾遺集賀の哥に声〻高〻三笠のとあり漢の武帝の時嵩山三びび万才をよびゝを吏卒ゝか聞り其ゆゑに大室の祠を加増ゝ其山の草木ときるゝと禁ゝ山下ゝて三百戸を附屬ゝ崇嵩と名づけ貴まるゝと支文類聚前集史記にもゝゝ此故支をふゝ三笠山和歌に藤原姓の祖神の跡ゝ山ゝ御代をまもりの故あるゝ万代と三笠とつゞけ三びびゝ心をそゝきといふゝ天が下とつゞけゝ笠と雨の縁語なり

戀

爲君薰衣裳君聞蘭麝不馨香爲君事容餝君見金翠無顔色

白

文集樂府の大行路の文に夫婦を借て君臣のわらゝ終ざるとそゝ臣君に合躰もる時に忠言諫言君にうちひらる君に容らざる時に忠言却て不忠とゝるゝと美人の寵愛ゝゝゝちと
ゝるもひるゝさゝゝゝ蘭蕙麝香のゝひを薰ゝんゝも設

更闌夜静而長門閉而開不月冷風秋なり。團扇杳而共に絶えぬ

行宮に月を見て心を傷ましむる色夜

長恨哥の句に唐の玄宗皇帝蜀の中道にて楊貴妃を失ひ恋ふるのあまりに旅の皇居と行宮と云都にて貴妃とともに見し月を見るにつけ心とさもるいろにあらぬ夜さめさびしく巫陽の猿をきけばさらぬさへ蜀道の旅のくるうきふしにくるるさ乃きくにつけて声をあらそふ巫峡の猿のこゑ猿の詩の処見合ゞ　玄宗は安祿山が乱ふるゝと落蜀へ行幸あり〳〵

春風桃李花開日秋露梧桐葉落時　白

是も上に同じ玄宗貴妃を別る花のひ〳〵春の朝も梧桐の一葉ちるもの秋の夕もひとつのものさびしきものとし時々おつけてさもれのらぬ心の猿をきけばさらぬさへ蜀道の旅のくるうきふしにくるるさ乃きくにつけて声をあらそふ巫峡の猿のこゑ猿の詩の処見合ゞ　玄宗は安祿山が乱ふるゝと落蜀へ行幸あり〳〵

夕殿螢飛思悄然孤燈挑盡未能眠　同

上に同じ夕べの殿おのづからとびてとゝろもいとぶかりひまさへ悄然と燈のきえんとするとかげくて彷彿くゝありひあすくるの

南翔北嚮難付寒温於秋雁東出西流只寄瞻望於曉月　後江相公

春風桃李花の開日。秋露梧桐の葉の落時

夕殿に螢飛て思悄然たり。孤燈挑盡て未眠て能（未）

南に翔北に嚮。寒温を（於）秋の雁に付難。東に出西に

更闌夜静長門閉而不開。月冷風秋。

張文成

團扇杳而共絶

遊仙窟の文とあまたゝび今此文なゝ誤りつゝふるゝ者ゝが作者も知べうゝず初夜より曉まで五ッおろち更と云さるゝ夜ゝ文選に漢孝武帝陳皇后の竜ゝえて長門宮と閉とあまゝ長門ゝ宮の名ゝ閑ゝ寂静ゝ秋の月すさまゝく風立そもゝ團扇もえて用なきを云て我身の幸せゝまぬ心に比して共にゝあゝと作まろ班婕妤竜ゝとろ后趙飛燕竜せらるゝ時班女團雪の扇とつゝ怨の詩とゝきゝと云をも含り扇の詩ふゝ已杳い杳冥とつき冥ゝ寂ゝとあつゝ物のうげろゝてゝろ

行宮見月傷心色夜雨聞猿斷腸聲

流。只瞻望を囮曉の月ふ寄

聞得さう園中ふ花の艶るを養こと。請君一枝の春を折こと許

寒閨ふ獨臥て夫婿無。蕭郎が馬蹄と狂こと妨不

聞得園中養花艶請君詩折一枝春

紀齊名

九條右丞相師輔公より呉越王ふ報ずる書を相公書もう〻呉越王とい隔るるの作名ん莊子文選ぐふ空名とうけるぶ〻〻〻广の年ど

ふ南よりけう北よもくいも夫ふつけても寒〻〻ん温〻〻んの音信もえやん

月の東ふ出西ふ〻〻むさ流〻〻ふつけてひくりかゞめやり心といさまーむる

ぢうへと云ころん瞻望い毛詩の字うそこのぢむと訓此句男女の情

を云ふあ〻ねど恋ふ〻ん恋の部ふ入〻ふ

寒閨獨臥無夫婿不妨蕭郎狂馬蹄

美娘の深閨ふ育まれることきこえこと云と園のうちふ

艶ける花を手ふとつくり請らくふ其美人とうれさのいきこと云と花

の春ふ咲さると一枝手折こも許してとゞめるといふこと

人の婿ふ〻〻人と作りてあくふ園と閨ふ作る李白ふ非〻

大江姓式部少輔ふ人美濃国十市の采女といふ女才賢采女

よく詩を作と云を思ひうけて詩をあくふる其和詩へさいさらやのくふ

臥て夫も婿もなく身なるを馬のひづめと此方（まけて来のぐ）妨

ぐふあ〻ぐ〻題和江侍郎来書と有て式部少輔を侍郎と云唐

名ん蕭郎と作るも江侍郎ふ又云八省兵部民ー刑ー治ー式ーの大

輔少輔い子〻〻今少輔をやうやと唱ふゆ〻〻ふんの調ぞや官内中務大蔵ふを云

貞女峽空唯月色窈娘堤舊獨波聲

妻なーやめて居る意を作ー詩の和韻ん操〻ぐーんと貞女爲憲

と云ふなぞ〻〻相応なる地名とう出て貞女峽の月のいろいとゝ〻

〻ー妻の先ぐらて独ひすくもる窈窕なる娘ふようそへて窈娘堤

と云地を出セう其ぐ〻娘も今なけまば堤も旧て波のこゑのこゑの

さびーさ躰と云さひくう住とふーひーん一説ふ源の

規材子鰥居して作ると和す規材い誰ふ〻〻〻ふ相規

古今

ひぐ〻ふいひもも〻びてもの進と沼とぐ〻ぐ〻で窈娘

あををぐうのんひとうて身ひうう

もくんゆくふも心の落着をもも〻ぬん

拾遺

あ〻ぬつ〻ものよあ〻ふ〻ぬるまびとうで待ふまきある人丸

たのもつ〻〻ぐ〻〻んとちぐうたのめる心あ〻つ〻云う心ちく

ぐーとぞ今い待まーと思ひきるもさぐぐうあ〻く来ぬとまつ心る

まさうくと餘情ぐ自〜
感慨うたうるぐ〜とぞ

古今
とくんといひなりふ老月のみ澄む月を待出つるは素性

宗祇玄旨の説有明の月をまち出る心一夜の義とあ〜べくあらず
月日をなぐるゆ〜と秋さへ長月九月のそらにはなるゆくさまとよく
思入てあぢくふべき哥なり餘情〜ぐ〜と哥とぞ
有明の月の在ぐ〜夜あくる十五日と過下弦の月へ

無常

観身岸額離根草論命江邊不繫舟

身のあやうきこと岸の額の根なし草のごく命の定はなき
江の舟のつなぐことと心がをき身命のさはりと云観いつくはりひろく
羅龍羅維作バ悲

年年歳歳花相似歳年年人不同

花のいろ〜年〜かはることなく人い歳〜老去て易りゆくと云
宋思問
此詩唐詩選も出唐詩遺響ふ劉希夷ぐ作るとと希夷と殺
して思問我作と称
もとと云説あり信ぐ〜

蝸牛角上争何事石火光中寄此身

蝸牛いとつもりく角牛ふ似るゆゑ名づく荘子ふかの角白
の上ふ各二の国あり左ふ觸氏右ふ蠻氏二国時々地とあ〜そ〜
て相さうふとある荘周ゲ寓言ふりくづけうの角いたのむひあた
るものなりおそれるある国のいづくに争ふいあぢきなきことなるべ〜此世と
たとつまび果してうの角のあるひるたぐこ〜夫ふ何ぞ人をろ
心を争ふぐとく身のとるたい石火の光のきえやすきたとのたとへ
金を石ふ打ば火の出る
これを石火といふ

生者必滅釋尊未免栴檀之煙樂盡哀來天人猶逢五衰之日

後江相公

重明親王の北の方四十九日ふ後江相公の書きとる願文なり経ふ
夫生輔ふ久とあるを生者必滅ふらいくり釈尊と鶴林ふ入るも時

蝸牛の角の上ふ
何事をぞ争。石火
の光の中ふ此身
を寄

生ある者ハ必滅す。
釋尊も未栴檀之
煙を免(未)樂盡
て哀來。天人も猶
五衰之日ふ逢

朝に紅顔有て世路に暮て白骨と為て郊原に朽

秋月波中の影と観て雖未春花夢裡の名と道（未）

拂檀香を焼火葬せらるべ教主の如来も無常とのがれと云五衰い天人五ぐ佛氏の書に如彼切利天雖快樂无極臨命終時一五衰相現一云頭上華鬘忽萎二云天衣塵垢所着一云頂中光滅三云脇下汗出四云両目數瞬五云不樂本所居是相現時天女眷属皆悉遠離とゝう六波羅密経に出

天人のたゝ〻もゝうきめをのゝくことなしとゝう

朝有紅顔跨世路暮為白骨朽郊原

冷泉院の御時麗景殿の女御中陰の時依る願文と云 義孝少將

こゝき時紅顔あり〻世をわるも郊原の白こつとゝる無常心

雖観秋月波中影未道春花夢裡名

維摩経に此身如水中月とあると取荘子夢に蝶 後江相公

ゝのしゝろをぐに以て此身は秋の月の波に浮るゝげのごゝく

て常住不變なゝさるを觀念するとゝいとも

いまゝ夢の世をのがれそびとゝなゝう

拾遺

世の中をとゝはたゝん相ゝがけこぎ出て跡のあとの白波遠ざかる

白

万葉集に山たゞ舟のあとかたもなくこゝとあゝう哥の心はあきらかに恵心僧都和哥を狂言綺語のまぎれとてきゝひゝぶ恵心院ゝう湖水に舟のゆくをゝゝ少童子の此哥を吟詠せゝときゝれ仏道修行のもとゝなるべき道ゝとて二十八品のうち十樂の哥なゝどよまもゝて元輔袋

草紙に

新古今

未だ見ぬ人の為にとて世中のをとをぞ聞ためるらん　良暹法師

末の梢の木下に少の遅速あゝとも

いづれも消るゝと人のいのちはたゝ〻

拾遺

くれぬまの月のかげのゝうちなれば世をうき身とは思ふ哉　和泉式部

詞ゝきふ世の中心がゝくかぎりなく常なるこゝろ公忠朝臣

のゝゝとゝてつゝとる此あいだ病おゝくなゝるゝけゝとあゝうこの哥

ゝみくゝのゝなくゝのゝとゝ

書きさらぬゝう哥の心はあらん

闇夜猶行明月地人間却踏白雲天

此句ハ本もあり雪の景を作し〻闇の夜ハ明月の地と行ごとくゆきいづくゝいづくまで白雲の天のごとくそれをあゆけば人間が天を踏てゆくとあるとゝ

謝觀

秦皇驚歎燕丹之去日烏頭漢帝傷嗟蘇武之來時鶴髮

謝觀

白と賦し〻燕の太子名は丹秦の国に人質となりしが元より孝心の人なりしかば時太子丹が国にゆきて親に対し心をきうなるもの此支を後ぐんしに秦皇の情を知ってあさましくつく烏のかしら白くなりて馬に角の生ん時汝を免すべしと云きけり太子天に仰ぎて歎ずして云天我心を察せよ地に俯してえんじて云地我心を推せよと申して白きからの烏とびきたり秦皇の殿上にとまり又額に角の生る馬宮中に走入り秦の始皇大ゐにおどろきたまひて丹をとめ〻史記に出燕丹が至孝天地を感応する処

銀河澄朗素秋天又見林園白露圓

毛寶亀歸寒浪底王弘使立晚花前

なるべしとそ漢の昭帝蘇武が匈奴に捕つ十九年ぶりの辛苦に毛髪鶴のごとく白くなりてとうとう来りしと傷嗟し蘇武が詩に詠史の詩雁の哥の釈に見合すべきなり

銀河澄朗素秋天又見林園白露圓

白と云に題す四韻に銀河があきのそらに澄て白く朗に秋い白色に配するゆえ素秋と云林や園に圓くあるけ露も白きと云

順

毛寶亀歸寒浪底王弘使立晚花前

上の詩の胸句に蒙求に毛宝白亀とあり江のそこに白亀の甲ゆえ五六尺あるとゝ毛宝字は碩真晋の世の人なり万騎とゝ乙毛宝打まけて江に入り石とむらちてすく岸に買ってゝ江に入るちゝが其のち石虎の仇三いとしい姪ゝ〻ゝ浪もろ〻陶潛字は淵明酒とゝ〻ゝ九月九日に

同

蘆洲の月の色て潮に隨て滿。蔥嶺の雪の膚に雪與連り

霜鶴沙鷗皆愛ナ可。唯嫌年鬢の漸皤然ルこと

酒とのまんとそふけまへ東離のもとに菊とつまてさすくる処へ江州の刺史王弘使と以て酒とわくる其使白き衣と著へ南史に出晩花いろたくるとよ菊と

に使も花も白きころとふくんでいて

蘆洲月色隨潮滿蔥嶺雪膚與雪連

同

上の詩の腰句に蘆の生る洲先の月のひろもしろもとりふ

ころ白きころに蔥嶺い大雪山の北无熱地の南にあること西域記に其山きこめて高くつもる雪きえず又文選に蔥嶺い涓州にありなこよの雪ゆき雲につもること作雲も雪しろまと云

霜鶴沙鷗皆可愛唯嫌年鬢漸皤然

同

上の詩の落句にて通じて四韻律一章に白き鶴といろんこと霜の字とよりる沙も鷗もこよう白しまろこのあり

て是らいまわしそあそべし我こまろる鬢の漸にしろき

ぐろいきこひいこへべきのこあるこ皤然いしろきころん

白きこをよこつこん餘情うぎうる一本ま

まこけこるる月うげふ雪をこけてとあり

和漢朗詠集抄卷之八　大尾

朗詠注本世ゝにあるこの頃序し物中永徳雪抄最
も世ゝ惜らくは人の詩天宝遺民の作を年歴を
詳ならず全詩中處ゝ有之且詩歌作者名字位階
等のごときも事を闕り家大人蘭山先生折衷して簡
約更に一部を抄録作者ゝ名位巻首に列して欠ける
所を補ふ全八巻先生自云故人の
糟粕を嚼ふ罪と謂ふ聊訂誤の新なるを徴て巻末に述ると云

享和三癸亥
孟煬日　男　高伴恭

書肆

京都三條通升屋町　出雲寺文次郎
同　寺町通松原下ル　勝村治右衛門
大坂心齋橋通北久太郎町　河内屋喜兵衛
同安堂寺町　秋田屋太右衛門
江戸日本橋通壹丁目　須原屋茂兵衛
同本町通横山町壹丁目　出雲寺萬次郎
同芝神明前　岡田屋嘉七